D.GrayMan～聖剣使いのエクソシスト～

ファイター

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの死亡フラグ満載の世界に転生してしまった!?

にじファンにて投稿していた勘違いものになります。Ｄ．ＧｒａｙＭａｎの二次創作って少ないよね。勘違いものになるともっと少ないんじゃないの？ってなりまして。

あぁ、Ｄ灰の勘違いものが読みたいと思って、なら自分で書いてみようとなり、ここに至りました。

勘違いものは、この作品が初めてになりますね。東方よりも前に書き始め投稿していたので。

目次

アーサー・ペンドラゴン　1
クラウド・ナイン　9
第三話　19
クロス・マリアン　29
第五話　40
ロード・キャメロット　45
アレン・ウォーカー　57
第八話　71
アーサーが如何様にしてアレン♀を知ったか　80
アーサー×アレン×リナリー　88
任務前　100
11・5話　110
中央庁　118
社交界　128
13・5話　サーシャ視点　142
戦闘開始in箱舟　146
戦闘開始in箱舟―その2　155
第15話　162
第15・5話　170

アーサー・ペンドラゴン

転生した。そう表現するほかなく、現状で一番合っている表現がソレだった。だが、転生した世界はＤ．ＧｒａｙＭａｎの世界だった。そう、Ｄ．ＧｒａｙＭａｎだ。主人公がＡＫＵＭＡを撃滅していく。そんな漫画だった筈。筈、と言うのは、最後に漫画を読んだのが。そう、あれは確か……２１年前だったか。あ、ちなみに俺の肉体年齢は２４歳。

「アーサー、どうかしたのか?」
「いや、なんでもない」
「そうか?さっきから空なんて見つめて、まるで不良のようだぞ」
「……」

その不良というのは、アレか。クロスのことか。いやぁ、確かにクロス元帥は不良みたいな人だけど、それなりにいい人だった。お酒くれたり煙草くれたり。あれ、これ不

良じゃね？

「クロスは、まぁいい人だよ」
「いや、アレは確実に駄目な人間の分類に入るな」

クロス、一体クラウドにナニを見られたんだ。この人に、ここまでダメ人間って言われる人間は初めて見た。そう思考していると、風が吹いた。俺が、俺たちが居る場所は海のど真ん中。大きい船に乗って今は任務地に移動している最中だ。こう、船で移動している感じって怖いんだよ。過去にバナナボートに乗ったことがあるんだけど、その日は波が高くて目の前で走る小型船は視界から消えるし、波の頂点から落ちる時なんて「ひぅぃ!?」って声が出るし。

……え？

「……クド？」
「今の声は私じゃないぞ!?」
「キキッ」
「起きたのか、ラウ」

子ザルである。だが、ただの子ザルではなく時には大ザルになったりする多芸な猿だ。

「それにしても、ずいぶんと可愛らしい声で鳴くのだな」
「なぁっ!?」
「ラウ」
「え?」
「え?」
「キキッ」

ポケットに入っていた紙袋を取り出し、そこからクッキーを出す。うむ、美味い。お、ラウ。お前も食うか?そうか、食うか。クラウドの肩から俺の肩に乗ってきたラウに、クッキーを手渡し俺ももう一枚。美味い。肩の上でクッキーをカリカリと齧るラウは、正直に可愛い。

「んんっ。私にもくれないか?」

「はい」

　前に出した紙袋からクッキーを取り出し、クラウドも齧る。このクッキーは出来立ても美味しいし、冷えても美味しいで俺のお気に入りだ。まだ、只のエクソシストだった頃に、任務で行った街にあったお菓子屋さんで買ったのだ。それから都合が合えば買っている。今も昔も変わらない味だ。

「このクッキーは、やはり美味しいな」
「此処にコーヒーでもあれば尚更、な」
「アーサーの任務地は、ヨーロッパだったか?」
「少し、寒いらしい。そういうクドはアメリカだろう」
「はは、私は故郷に戻るのと同じだからな。なにも心配はないさ」
「アメリカはいいなぁ」

　アメリカ。ヘルメット無でバイクに乗れる国。無免許で色々と出来る国。自由の国。懐かしいなぁ。旅行に行った時は色々したもんだ。射撃場で初めてリボルバー銃を撃ったり。ジェットスキーをフルスロットルで遊びまくったり。そういや、あの時はア

クセル全開で曲がり損ねて落下して、速度の緩まったジェットスキーに頭ぶつけたなぁ。……痛かった。てか、故郷がアメリカっていいな。俺なんか日本人だったから、将来なんてのは殆ど決められていたようなものだし。

「故郷……か」

「ぁ、アーサーの故郷はどんな所だ？髪の色や目の色でだいたい予想はつくが……どんな所なんだ？」

俺の故郷は日本だ。だけど、この世界の日本じゃなくて、遠いようで近い平行世界で、帰ろうとしても帰れない世界で。そう言えば、この世界の日本って無かったんじゃないかな。あんまり覚えてないや。

「俺に故郷なんてないよ」

「……え？」

「強いて言えば、あの場所か教団が故郷かな」

この世界で、俺が生まれた場所はない。生まれた場所はないが、長くいた場所は湖の

畔か教団だ。と言っても、教団は最近帰ってないし湖にも行ってないから、俺って旅人？孤高の旅人ってカッコよくない？いや、カッコイイ。紅い弓兵みたいに、「フッ」って笑いながらあっちに行ったりこっちに行ったり。いやぁ、そういうのいいな。

「ヨーロッパ、楽しみだ」
「お前はコーヒーが飲みたいだけだろう？」
「はは、バレてる」

バレてーら。まぁ、コーヒーが好きなのは変わらないし美味いコーヒーあれば最高。ジェリーの淹れてくれるコーヒーも美味しいんだけど、やっぱり可愛い子が淹れてくれるコーヒーってのも中々に美味しい。

「ん、風が気持ちいいな」
「そうだな」

偶に潮風に当たってみると、新鮮でなかなか気持ちい物がある。アレだ、偶に教祖様が頂点の店に行ってポテトとか食べたら美味しい。そんな感覚。普段は塩ポテチしか

食べない人がコンソメ食べた時の様な。俺はコンソメ好き。

「クドは、さ」

「ん？」

不思議そうに俺を見上げてくるクラウド。普段は垂らした前髪で隠している傷が、風によって見える。だけど、それも合わせてクラウドは素晴らしい女性だと思う。

「エクソシストじゃなかったら、どんな事をしていたの？」

「私は……そうだな。ラウと共に世界を周っていただろうな。エクソシストでも同じことだがな」

「世界を巡るってのはいいな」

「あぁ、世界は見て回る価値があるからな」

世界遺産とか、あの神聖な空気は行った者だけが味わえる雰囲気だ。こう、昔の人が作り上げた一種の芸術であり神聖なものだ。もしも神代の創り上げた遺産があれば間違いなく見に行く。どれだけ金がかかろうが見に行く。と言うよりも、見に行きたい。

手元にソレがあるだけに。

「ペンドラゴン元帥、そろそろお時間です」

「わかった」

だだっ広い海の中心で何を言うんだと思うが、これが俺にとっては普通。いや、普通にしたくないんだけど、途中まで送ってくれって言った手前、ここが譲歩できる限界らしい。肉眼では見えるわけないが、地図上では近いらしい。らしいと言うのは、俺自身が地図を確認してなくて、方位磁石だけで進もうとしているからだ。海上で地図なんていらないし。船みたいに潮に流されたりしないし。

「それじゃ、クド。また会おう」

「あぁ、また会おうアーサー」

「キキッ」

微笑むクラウドに手を振り、海に飛び込んだ。

クラウド・ナイン

波風に揺られるプラチナ色の髪の毛は、彼が彼であると証明してくれるモノの一つだ。クロスとは違う、プラチナ色の髪。教団服から覗く白い肌は、どこか病的なものを感じさせるくらい白い。彼との出会いは、何時だっただろうか。私が入団した頃には、もう彼はＡＫＵＭＡと戦っていた筈だ。だが、その体には傷は無く綺麗なものだ。

「アーサー、どうかしたのか?」

彼の後ろから近づいていくと、潮の匂いとは違う彼の匂いがする。男性特有の匂いでは無くて、彼だけが持つ匂い。太陽の匂いだろうか。とにかく、落ち着く匂いだ。

「いや、なんでもない」

アーサーがこう言うときは大抵、何かを深く考えている時だ。重要な案件だったり、上層部から頼まれた依頼の裏を確かめようとしたり。

「そうか?さっきから空なんて見つめて、まるで不良のようだぞ」

不良と言うのは、勿論クロスのことだ。あのバカは、エクソシストは体が命だと言うのに煙草を吸うし酒も浴びるように呑む。装備型のクロスならソレが解っているだろうに。

「クロスは、まぁいい人だよ」

「いや、アレは確実に駄目な人間の分類に入るな」

アーサーを引き摺りこみ、酒を飲むのに誘い煙草を吸うのに誘い……まったく。アーサーは、その、私の大切な人なんだぞ。それをクロスは横から掻っ攫う。こうして二人でいられる時間は限られている。元帥になってしまってからは何時もそうだ。

「ひぅい!?」

な、ななラウ!?驚かせるな！心臓が止まるかと思ったぞ?!

「……クド?」

「今の声は私じゃないぞ!?」

は、恥ずかしい。恥ずかしくて顔から火が出そうだ。

「キキッ」

「起きたのか、ラウ」

ラウと戯れているアーサーから、追い打ちの言葉が出た。

「それにしても、ずいぶんと可愛らしい声で鳴くのだな」

「なぁッ!?」

そ、それは私の声か!?聞こえていたのか!!?

「ラウ」
「え？」
「え？」
「キキッ」

何ともいえない空気。はぁ、もう三十歳なんだぞ、私。アーサーよりも年上なんだぞ、私。しっかりしなくては。いくら教団に入るのがアーサーよりも後だからと言っても、そろそろ年上の威厳と言う奴をな……。……。ラウ、何を食べているんだ。

「んんっ、私にもくれないか？」
「はい」

差し出された袋からクッキーを取り出し、齧る。やはり、このクッキーは美味しいな。あの店主は元気にしているだろうか。

「アーサーの任務地は、ヨーロッパだったか？」
「少し、寒いらしい。そういうクドはアメリカだろう」

クド。クラウドだから、クド。呼びやすいように、そう呼ばれ始めた。気が付けば、二人だけの言葉になっていた。他意は、ない。

「はは、私は故郷に戻るのと同じだからな。何も心配はないさ」
「故郷……か」

その言葉にどれだけの意味が込められているのかは、私には解らない。彼の故郷は、存在しないのだから。否、存在はしていたのだろう。でなければ彼は生きてはいないし、ここでこうして私と喋ってもいない。

「ヨーロッパ、楽しみだ」
「お前はコーヒーが飲みたいだけだろう？」
「はは、バレてる」

彼女が出してくれるコーヒーは美味しい。可愛い子が出してくれる、と言うのもあるのだろうが、兄に長年淹れてきたコーヒーは本当に美味しかった。

「ん、風が気持ちいいな」
「そうだな」

少し間が空き、潮風を浴びた。横に居るアーサーは水平線の彼方を見ていた。それが、どこを見ているのかが怖くて声を掛けれなくて。

「クドは、さ」
「ん？」

な、なんだ。今なら何でもしてやるぞ？

「エクソシストじゃなかったら、どんな事をしていたの？」

くっ、そうだ。こういう男だったな、こいつは。

「私は……そうだな。ラウと共に世界を周っていただろうな。エクソシストでも同じことだがな」
「世界を巡るってのはいいな」
「あぁ、世界は見て回る価値があるからな」

サーカス団の皆と周った世界は面白かった。色んな人がいて、色んな動物がいて、色んな建物があって、色んな食べ物がある。それだけでも面白い。

「ペンドラゴン元帥、そろそろお時間です」
「わかった」

も、もうそんな時間か。知らせに来てくれたファインダーを帰し、アーサーの方に振り向くと彼は装備を確認していた。金色のコートの下には、軽装な騎士甲冑を纏っている。手甲、脚甲、胸甲。薄い装甲だが、ある方がよいとのことでコムイが作ったのだ。薄いと言っても、あの変態が作り上げたのだ。脆いわけがない。

「それじゃ、クド。また会おう」
「あぁ、また会おうアーサー」
「キキッ」

笑顔で解れる。これがアーサーと私のやり取り。また一年、彼とは会えないが問題は無い。コートのポケットに手を入れると、コツンと硬い感触が。ソレを取り出す。ソレは小さい本の様なサイズだが、中身は全く違う。

パカ

「フフ」

パタン

パカ

「フフフフ」

パタン

もう豆粒程に見えるくらい遠くにいるアーサー。何故か顔がにやけてくる。いや、原因は分かっている。当たり前だ。

「キキッ」

「ん、お前も写りたかったか?だが駄目だ。これは私とアーサーのものだ」

さて、少しでも任務を早く終わらせよう。アーサーに合流するのもいいかもしれない。いや、フロハが先に合流しているか……。早く終わらせるか。

「行くぞ、ラウ」

「キキッ」

最後にもう一度だけ開く。そこには、足を組んで笑っているアーサーと少し表情の硬

い私が写っていた。

第三話

空を見上げれば、青空が広がっている。のではなく、今にも雨が降りそうな雲が広がっている。前後左右を見てみれば、人々が普段の生活をしている。路上で立ち止まって話をする女の人。テラスでコーヒーを飲みながら談笑する男の人。様々な人が様々な事をして、時間を過ごしている。それは、とても平和な光景。とても、この中にＡＫＵＭＡが混ざっていないと疑いたくもない光景。だけど、それはエクソシストにとっては致命的な部分が欠落している。常に人間を疑わなければならない。これが出来ないエクソシストは、例え元帥クラスの力を持っていようが早死にする。何時、隣の人間がＡＫＵＭＡになるのかが解らないのだ。昨日は普通に喋っていた人間が、今日はＡＫＵＭＡになっている。

エクソシストと呼ばれる職業で、一番嫌な出来事がこれだ。人間を、人類を守る為に戦っていると言うのに、人間を疑わなければならない。そういう人間も居るのだ。「ブローカー」。教団の人間はそう呼んでいる。ＡＫＵＭＡに協力する人間だ。まぁ、結局

のところ殺されるのだが。

「……暇だなぁ」

　ポーチに入っている１３個のイノセンスは何の反応もなく大人しくしている。適合者が近くに居るのなら、例え別空間であろうとも飛んでいくのだが。全く反応しない。……１３って不吉だなぁ。いやまぁ、俺のイノセンスは防御に秀でてるけどさ。それでも１３個も持たせるのはやり過ぎだと思う。他の元帥、クロスは魔術も使え優秀なのに対し所持しているイノセンスは５つ。クドは３つ。教団随一の防御力を持ったフロワさんであっても７つなのだ。戦闘凶のソカロ元帥も３つ。敵陣に突っ込み過ぎて、何時死ぬか分からないって前室長を愚痴っていた。ケビン元帥は、真面目な老人なんだけど仕事が命って感じで、８８歳なのに戦ってるスーパー爺ちゃん。この人は前線にいるけど、ちゃんと周りの事を考えて戦っている。所持イノセンスは８個。

　んで、俺が１３個。んでんでんで～、にゃ～んで。とか何とか言ってる状況じゃなくて、これだけの数のイノセンスを持っていると言う事はそれだけ危険がある。事実、俺は結構、狙われている。ＡＫＵＭＡだけじゃなく、先ほど言ったブローカー。一番厄介

なノアにも狙われている。いや、これは教団に属す人間全員に言える事なんだけど……。まぁ、まずはご飯を食べよう。お腹が空いたし。腹が減っては戦は出来ぬと言いますし。

目についた喫茶店に入り、まずはコーヒを頼む。コーヒーってのは淹れる人によって味は違うが、その土地でしか味わえないコーヒーがある。教団のコーヒーは彼女が淹れてくれるモノ以外は苦みが強い。香りは中々。だけど、どちらかと言うと不味い方だ。科学班は恵まれていると思う
。

メニューを開く。テーブルにメニューを置く。店員に手を振る。そしてメニューの一番上の行に指を当て、下にずらした。

「お決まりですか？」
「えっと、ここからここまで」
「は？」
「ここからここまでで」

「か、畏まりました」

何故か店員にドン引きされた。なぜだろう？

――教団――

リナリー・リーは、コーヒーポットと人数分の容器の乗ったトレーをカラカラと押して科学班が使っている大部屋に向かっていた。そこには自身の兄であるコムイ・リーもいる。……仕事と言うか遊んで、だが。ここ最近、教団の中は静かだ。兄が少し……いや、結構な頻度で厄介ごとを起こしているが、それでも静かになったものだ。静かになることは、この教団では見慣れないものではない。ＡＫＵＭＡと日々、死闘を繰り広げているエクソシストとファインダー。彼らが死ぬなんてものは、悲しいが見慣れた風景だ。だが、そういった死の静けさとは違う静かさ。まぁ、何と言ってもリナリーにとっても教団にとっても消えて欲しくない人物がいないだけであるのだが……。

「コーヒー飲む人ー？」
「はーい」

大部屋に着いたリナリーは、誰に言う訳でもなく声を上げると周りから皆の声が返ってきた。ここにいる人たちは皆、コーヒーが大好きだ。もう中毒と言ってもいい。科学班の皆は、医務室のババァが淹れるコーヒーよりも年若くて強くて可愛いリナリーに淹れて貰った方が絶対に美味いのだ。そのことを面と向かって言うのには歳が離れているし、言ったとしても逝ってしまう。主に身体を改造されて逝ってしまう。睡眠不足で逝ってしまう。

「リーバーさん。兄さんはどこにいるの？」
「あぁ、室長なら部屋にいるんじゃないかな」
「リナリー、甘い物食べるー？」
「リナリー、これ上げるよー」
「お前ら、仕事に戻れ！」

リーバーの一喝で、集まってきていた科学班の皆が自分の机に戻る。が、リナリーが押してきた台車にはお菓子やら人形やら写真が積まれていた。

「悪いな、リナリー。こんな奴らばっかで」
「いいの、リーバーさん。皆、面白い人ばかりだから」
「そう言ってもらえると助かるよ」

コーヒーくらいなら何時でも淹れてあげる。そう言い残して、リナリーは兄の待つ部屋に行った。

「班長～、ズルいすっよ自分ばっかりリナリーとお喋りして」
「バッカ。そんなこと言ってないで仕事に戻れ。今日も徹夜になっちまうぞ」
「うへ～い」

コーヒーを啜る。美味い。彼女の淹れるコーヒーは。かの元帥も高く評価して居た筈。いや、彼がリナリーにコーヒーの淹れ方を教えていた。豆の選別から、濃さ薄さもだ。その彼は、今はヨーロッパにいるのだったか。まぁ、それは置いといて。早くこの

仕事を終わらせなければ、また徹夜だ。

目の前の扉をノックして、部屋に入る。皆が居る大部屋と違って、ここは指令室と呼ばれる部屋だ。兄は、殆どここにいる。用がある時や、少し気分を入れ替えたい時にリーバー達がいる科学班フロアに遊びに行っている。

「コムイ兄さん、コーヒーいる?」

「リナリーかい?うん。丁度コーヒーが切れていたんだよ」

ハハハ、と笑いながら差し出したコーヒーを受け取った。危なかった。兄さんはコーヒーが無ければ暴走してしまうほどにカフェイン中毒だから。今、兄さんが暴走しちゃったら、止めることの出来る人が少ない今の教団じゃ本当にマズイことになる。止めれる人間は、一人を除いた元帥の方々とリーバーさんくらいじゃないだろうか。中央庁でも止められないのかもしれない。

「最近の調子はどうだい?リナリー」

「なに、兄さん。毎日、会ってるのに……」

「いや、少し気になってね」
「もう。私は大丈夫。それよりも兄さんたち科学班の皆が心配」

なんだか、まだまだ子供の様にみられている様でくすぐったい。でも、科学班の皆の一週間連続の徹夜の方が心配だ。あの一週間のコーヒー消費量は一言で異常だった。それに、仕事が終わった皆は二日間は水を飲んだりトイレに行ったりする時以外は爆睡してたっけ。あれ、この状況って前にもあったかな。うん。あった。確か兄さんが「コムリン」ってロボットを作った時に似てるんだ。

「兄さん。また変な物創ったりしてないよね？」
「な、なななんのことかなリナリー」

この動揺の仕方は、ダメダメだ。

「ナニを創ったの？」
「ま、まだ創ってないよ!?」
「まだ？」

「ハッ……」
「……」
「……」
「……」
「……う」

これ、怒ってもいいよね？皆に迷惑をかけるんだもん。怒っちゃっても、いいよね。

「また皆に迷惑をかけるつもりー!?」
「ち、違ーーーーう！」

頭にたんこぶが出来た兄さんと今後について話している途中で、ふと思い出した。

「兄さん、アーサー元帥にお金ってちゃんと渡した？」
「そう言えば、ペンドラゴン元帥にお金、渡してくれたかい？」
「……」
「……」
「「え？」」

クロス・マリアン

煙草、とは非常に人体に有害な物質が多く含まれいている嗜好品である。だが、人々は煙草を吸う。それは、一種の快感といっても違いない。ヘビースモーカーの人は、一日に二箱も吸ったりする。四十本だ。あの西暦であれば一箱４１０円程度。高い。非常に高い。しかし、それでも吸いたいものは吸いたいのだ。まぁ、何が言いたいのかと言えば。

「煙草っていいよね」

ぷかぷかと輪っかを作りながら煙を吐く。とあるモノが体内にある俺としては、有害物質なんてモノはモーマンタイなのである。クロスみたいに時間があれば煙草を吸っている様な感じでは無くて、言うなれば吸いたいときに吸う。意識せずにそうやって吸っていれば数は増えないし、少ない方だ。

「まぁ、暇だよなぁ」

今回の任務。任務と言っても適合者を探すものなのだが、そう簡単に適合者が見つかるわけもなく適当に全世界を周りながら遭遇したＡＫＵＭＡを殲滅する。ただ、持っているイノセンスに反応が無ければ俺は何も出来ないのであって、非常に暇なのである。

暇なら読書でもトランプでもしてろって？

いやいや、トランプは一人ではできないし、必要最低限の物しか持って歩けないから本なんて持ってない。元帥だからって、野宿は普通にある。一定の国であれば無償で宿に入れてくれたりするのだが、それは本当に一握りに過ぎない。

エクソシストには、サポーターとして一人か二人のファインダーが付き添う事になっている。が、元帥になれば話は別だ。その任務は、さっきも話したが適合者を探すことが主な任務だ。世界を周る為に、サポーターは足手まといなのだ。ＡＫＵＭＡ側は、元帥を殺す為にＬｅｖｅｌ２以上のＡＫＵＭＡを差し向ける。それも、一体だけではない。空を覆い隠す無数の数のＡＫＵＭＡ。一人でなら勝てる。だが、足手纏いが居れば

どうだ。守らなければならない。教団側も、それがわかっているからファインダーを付けないのだ。元帥と普通のエクソシストの実力は、天と地ほどの差がある。シンクロ率、判断力、戦闘経験。

それが理由。

「さて、行こうか」

だから、元帥には高性能の通信機が支給されている。

『おい、誰かいるか?』

耳、ピアス型の通信機に声が入ってきた。聞き覚えのある声。

『アーサーだ』

『アーサー?あぁ、どこにいる?』

『宿の裏手』

『はぁ？まぁいい。今すぐこっちにこい』
『クロス、何かあったのか？』
『大ありだッ、クソ』

その時、空気が、大地が揺れた。そして、雲を突き破って伸びていく一条の光。

『手を貸そうか？』
『あぁ、頼むぜ』
『わかった。直ぐに向かう』
『速く頼む、ってデブがどうしてそんな速く動けるんだよッ！』

どうやら、クロスはデブと戦っているらしい。嫌だなぁ、と思いながら地面を踏みしめて駆けだした。

そこは、緑豊かな森だったのだろう。木々が生い茂り、野生動物が生活し、緑の匂いが一杯に広がり、葉の間から太陽が差し込む。そんな幻想的な空間だったのだろう。だが、そんな面影は存在しない。最初から全て無かった。地面は抉れ、木々はへし折れ、ガスが立ち込める。まるで地獄の様な惨劇。それを、向かい合った二人が作り出していた。

一人は、ジャッジメントを油断なく構える、黒の教団元帥クロス・マリアン。

そして、もう一人は

巨大な大剣を余裕綽々で構える千年伯爵だ。その顔には笑みが刻まれている。

「チッ、しくったぜ」

「油断大敵ですよ〜、クロス・マリアン」

口の中の血を吐きながら、自分の身体を確認する。初手。完全に不意打ちだったデブの必殺の一撃をギリギリで避けて受けた肩の傷。今も溢れ出る血に、容赦なく体力と集

中力を奪われている。左手の感覚はもうない。むしろ、左腕がある方が邪魔なくらいだ。むしろ、それよりもマズイのが弾だ。

「会うのは何年ぶりでしょうね～」
「ハッ、デブに会った日なんて日記に書いてねェ」
「まるで我輩とよく会っている様な口ぶりですねぇ～」
「どォだろうな」

マリアは、とある事情で使用不可。隠れる事なんて出来ない。いや、隠れたとしても辺り一帯を吹き飛ばされるだけだ。チッ、速く来やがれアーサー。

「行きますよォ～」
「クソッたれが！」

伯爵が飛び出しきた。
引き金を引く。

残弾、残り三発。

木々が自分を避けている。なんてことはなく、そう錯覚してしまうほどに加速しているだけの話。細い木ならば斬って進む。踏んだ土には足跡がくっきりと残る。足音もズドズドとした、まるでバーサーカーが走っているかの様な足音だ。いや、バーサーカーなら木を斬るなんてことはせずにそのまま突進するんだろうけどね？俺にはそんな耐久力ないし。

『ぶえッくしょん！』
『余裕ですねぇ～？』
『ハッ、俺は死なねェ』

聞こえてくる声は、いつも通りの余裕のクロスの声。いや、普段は言わない言葉を使ってるだけだから余裕がないのはわかっている。けど、くしゃみするなんて本当に余裕だな。音が近くなってくる。もう少しで着くぞ、クロス。

目の前に迫ってきた木を切り裂く。それと同時に飛んできた白いナニかを蹴り飛ばした。クロスが見えた。向こうもこちらに近づいていたみたいだ。煙草に火を点け、空薬莢を排出している。

「よオ、コンボが決まったな」

「え？」

クロスが指差したその先には、上下が反対になって頭を摩っている伯爵だった。蹴り飛ばした白いナニかの正体は千年伯爵だった。

千年伯爵。

千年伯爵？

「千年伯爵？」
「あぁ、あのデブ。いきなり襲ってきやがったぜクソ」

いやいやいや。一人で戦ってたのかクロス。流石の戦闘能力だ。感服する。

「ちょっと治してくれ」
「あ、わかった」

大きな傷が肩に一つ。小さな傷が無数に。

「いやぁ、弾が切れてな。ハーッハッハッハッハ！」
「それで戦ってたのかお前……」

敵を一歩も近寄らせないのがクロスの戦闘スタイルなのに、銃弾もなく戦い続けるなんて。

俺なら逃げ出す状況だ。クロスすげェ。

「いやぁ、この状況はマズいですねぇ」
「チッ」
「うわぁ」

服に着いた埃を払いながら大剣を傘に戻した。どういうつもりだ？

「元帥、それも最強クラスの二人とは正直キツいので、ここは引かせてもらいます」
「さっさと帰れデブ」
「いやいや、貴方なら何とかなりそうだったんですがねぇ？」
「ハッ、もう肩も治ったからな！無敵だぜ？」

最強クラスって俺の事？ねぇねぇ、俺の事なの？

「クロス・マリアン、アーサー・ペンドラゴン。では、またの機会に」

「死ね、クソデブ」

ちょっ、そこで無視して消えないでくれる？ねぇ、ＡＫＵＭＡの出現率が他の元帥とは違うのは最強って勘違いされてるからなのか？止めてー！俺、死んじゃうからやめてー！

「俺は違うぞ」

「おい、俺は疲れてんだからいいだろ」

……えー？なんで呆れ顔止めるんですかクロス。俺、死んじゃうんだけど。

「よっし、飲みにいくぞ！」

「あぁ、もう。好きにして」

肩を組んで進んでいくクロスに、俺は無抵抗で街に戻って行った。

第五話

バカ弟子にこの惨劇を見せたら、間違いなく発狂するだろう。右ひざに頭を乗せて眠る女、―確か名前はエリーとか言ったか―を優しくどけて立ち上がった。

「おっと」

寝たと言うのに、まだ酔いが醒めんのか。そろそろ歳かね。

「マスター、水」
「はいよ」

宴会を開いていた店の奥から出て、カウンターの厨房でコップを拭いていたマスターに水を貰う。

それを一気に煽り、飲み干す。美味い。

「昨晩は、えらく飲まれましたな」

「あぁ？」

「お連れの方は今朝、出て行かれましたよ」

「……なに？」

ノロノロと店の奥に戻りアーサーが寝て居た筈のソファーを見ると、女が寝ていた。彼女は確か、アーサーを接待していた筈なのに彼女自身の悩みをアーサーに解決してもらうなどの、接待業をしている女としてはありえない行為をしてしまった女だ。いやまぁ、彼女は一目惚れという奴だった。アイツの容姿は整っているし、何より雰囲気が普通の男とは違う。エクソシストなんて仕事をやってると、同期の仲間なんて殆ど死んでるし自分の班員のエクソシストの数も減る。

だから、自然と影のある、ミステリアスな雰囲気が出てくる。アーサーなんてのは、それに当てはまる。

アーサーはもう居ないのだし、俺にも任務がある。一応、アーサーに伝えてあるのだ

しコムイ辺りにも言ってくれるだろう。俺もそろそろ行くか、と思い壁に掛かってあるコートを取ろうとして眩暈がした。

「あー、クソ。飲み過ぎたか」

コートを持ち、もう一度カウンターの方で席に座った。今日はヤメだ。適当に宿でも取って寝よう。それに、まだ余裕がある。にしても、昨日のアーサーを見るからにアイツは戦闘狂かなにかか？

昨日の戦闘を思い出す。

残弾は一発。出血あり。敵は千年伯爵。リロードする隙も限りなく少ない。そんな絶体絶命の時に救援に来たアーサー。ここで初めてリロードが出来て、不利を悟った千年伯爵が撤退した。ここまではいい。むしろ、この展開が一番いいのだろう。だが、事もあろうことにアイツは

『俺は違うぞ』

と言い放ったのだ。さぁ、殺し合いをしようと言い放ったのだ。お前を殺すと言い放ったのだ。

止めてくれ。千年伯爵を殺すにしても被害が大きすぎる。ここら一帯が何もない大地に変わるところだった。俺も、もしかしたら死んでいたかもしれない。アーサーは、死なない。否、死ねない。

そういうイノセンスらしい。あの〝剣〟にそんな能力があるのかは疑問だが、何度も見てきた。アイツが死ぬ所を。

心臓を貫かれた。右半身が吹き飛んだ。頭を撃ち抜かれた。だが、その度にアイツは、アーサーは生き返った。イノセンスが遠くに吹き飛ばされている状態にも関わらずだ。意味が解らん。

「マスター、ここらで高い宿屋はないか?」

「そうですな。北にある宿なんかは高くていい女もおりますから、貴方のお目に叶うでしょう」

「そうか、助かる」

「あぁ、代金の方はどうしますか?」

「あー、俺の弟子が払いに来る」
「畏まりました」

一応、名前を書いてくれと言われたから書いて店を出る。表通りに面したこの酒場だ。店を一歩出ると、忌々しい太陽と人の喧騒が聞こえてきた。

「クソッ、飲み過ぎた」

江戸に行くまでの時間は、まだ十分にある。ゆっくりと酒を抜こう。あと、もう少し遊んでから行こう。

ロード・キャメロット

このー木なんの木気になる気になる♪
とかなんとか歌っていたら木に襲われたでござる。
ちょっ

「流石ハ元帥！この私の擬態に気付き尚且つ死角からの攻撃を完全に防ぐとハ何という戦闘能力！」
「Ｌｅｖｅｌ３と２か」
「お前がまだこの地区にいルことは伯爵様から聞いていル。故にＡＫＵＭＡの軍勢がここに集結しつつあ
ル」
「……」

うっそぉ～？

取り敢えず、この状況の簡単な説明をしようか。クロスと別れてから二週間が過ぎて、本部まで一カ月程度の距離まで来ていた。なるべくＡＫＵＭＡに遭遇しない様に大きな町を避けて列車や徒歩で移動していたのだ。この日は、食料が底をついたので最低限の食料を補給しに街に立ち寄ったのだ。そこでまぁ、妙な視線を感じていたのだが何時もの事と思いスルーして街を出たのだ。それが間違い。そこで気づくべきだったんだ。

汽車があれば、正規のルートを使って本部に帰るのだが汽車もなければ当然、徒歩になる。

なるべく早く本部に着きたかったから、真っ直ぐ移動していた。川も飛び越え、森も突っ切る。

一人は寂しい。と言うか、一人の時じゃないと出来ない事を移動中にしようと思いつくことがある。

歌を大声で歌ったりする時なんかスッキリする。偶にリボルバー式の銃をホルス

ターから早く取り出して構えたりする時なんか、思わずニヤリと笑ってしまう。コンテンダーを撃って、弾を抜いて装填する時なんか、もう最高に幸せだね！

黒いスーツ着て、黒いコート着て、胸から取り出すコンテンダー。あぁ、もう最高。

……。現実逃避はそろそろ止めようか。まぁ、簡単に言えば街を出て森に入って昔懐かしの歌を歌っていたらＡＫＵＭＡと遭遇したでござる。ござる。

「厄介な」

「その一言ですませますか」

「我々では元帥を足止めすルことは出来ても殺すことは出来ない」

Ｌｅｖｅｌ３とＬｅｖｅｌ２。二体程度ならどうにでもなる。近づいて斬ればいい。

アーサー・ペンドラゴン。

突貫します！

一歩でＬｅｖｅｌ３の懐に飛び込、一閃。驚く声を上げる暇もなくＬｅｖｅｌ３は真っ二つになり地面に倒れた。弱い。Ｌｅｖｅｌ３なら特殊能力もさることながら近

接戦闘も並みのエクソシストを殺すことは出来る筈なのに。何しに来たんだこいつ。

「あと一体」

「強いですねぇ。流石はアーサー・ペンドラゴン元帥」

何だ、このＬｅｖｅｌ２の余裕は。エクスカリバーを上段に構え、Ｌｅｖｅｌ２の間合いに入り再び一閃。爆散した。……本当に何なんだ？このＡＫＵＭＡ二体は一体何をしに来たんだ。まぁ、あっさりと倒れたのはありがたいことだ。こいつらの話だとＡＫＵＭＡの軍勢が俺の所に向かっているみたいだから逃げるとしよう。

エクスカリバーに着いた血糊を払い、この場を離脱しようとした時だった。酷く、ＡＫＵＭＡのガスが充満しているこの場に相応しくない少女の甲高い声が聞こえた。

「はろー、アーサー。元気ー？」

「あぁ、元気だ」

「あ、やっぱり？何時もより調子よさそうだもんね」

「……」

声のした方に振り向くと、先に小さなカボチャを着けた傘を広げて、黒いドレスを着た令嬢が楽しそうに立っていた。黒い褐色の肌に似合っている黒いドレスは、上流階層の貴族が着ているような見るからに高価なものだ。だが、それが恐ろしく似合っていた。頭に着けた白いカチューシャがヒラヒラと揺れた。

「あれ、また黙っちゃうの？この前みたいにお話しようよ～」
「ロード」
「何？」
「ロードたま！エクソシストなんかと喋っちゃ駄目レロ！」
「えー、いいじゃん別に。アーサーは私の能力も知ってるみたいだし、私が死なないのも知ってるしー」
「それでも駄目レロ！」
「えー……」

小首を傾げてレロと喋る。普通の女の子なら可愛い仕草だ。だが、彼女は普通ではない。

驚異的な回復能力を持ち、とある資格を有したＡＫＵＭＡとは別の存在。人間の上位種族とも言っていい、エクソシストの敵。ノアの一族。なのだが、突進してきた。胸に軽い衝撃。

「また宿題手伝ってよアーサー」
「ロートたま！駄目だって言ってるのにー！」
「とっ」

仔犬の様にじゃれてくるロードの頭を、思わず撫でてしまう。これがＡＫＵＭＡであったり男ならば迷わず切り捨てる所だ。和む。滅茶苦茶、和む。もうこのまま和んでいたい。けど、コーヒーとか煙草とかが合ったほうがいいかな。後、適度に美味い酒。あれ、俺って結構ダメ人間じゃない？

「もう、レロは煩いなぁ～。でも、それではお一人様ごあんな～い」
「あああああ!!」
「ちょ……」

足元に数字が浮かび上がったと思ったら、景色が一変した。森に居た筈なのに、いきなり部屋に放り込まれた。不思議な感覚。けれでも、一回目ではない。とは言え驚いたのは本当。

なかなか広い一部屋。そこには机とソファー。そして大量のお菓子が置いてあった。窓から見える景色は空だけ。扉は一つもない。

ここまで状況に付いていけていなかった頭が、ようやく回転し始め決断を下した。

か・ん・き・ん・さ・れ・た

「さ、座って～」

「もうしらないレロ」

レロを傘入れに入れたロードが席に座った。右を見て、お菓子。左を見て、お菓子。後ろを見て壁。もう何もすることもなく、いや、何もできない状況に追い詰められてしまい俺も席に座った。丁度、ロードの対面に座り置いてあったコーヒーメーカーのス

イッチを入れた。溜め息が出る。なんだこの状況。

「ねえ、アーサー。お菓子上げるから……って食べてるよもう」

「……ん？」

袋に入ったチョコレートを口に入れて、マグカップにコーヒを入れる。もうここまで来たのだ。

来てしまったのだ。楽しまなければ損というものだ。

「これ、手伝って。明後日までに提出しなきゃなんないの」

「算数か……。タバコ吸っていい？」

「国語も手伝ってね」

「わかった」

正面に座り真面目に私の宿題を見てくれているアーサーは、不思議な男だった。その戦闘能力は正に最強。Ｌｅｖｅｌ３の軍勢が相手であっても光の極光で一撃の下で屠りさる。その判断力は我々の遥か先を読んでいる様に肝心なところで邪魔される。今日だってそうだ。あのＬｅｖｅｌ３の能力で私の気配は確実に消えて居た筈なのに、私に気が付いていた。

だけれど、こうして接していると本当に優しい。私が、喉を乾いた素振りを見せると彼はカバンからジュースを取り出してくれた。こういうちょっとした思いやりがモテる理由なんだと思う。基本的に彼の表情は硬い。そんな彼が時折見せる笑み。これが堪らないっていう女性は数多く見てきた。

「ん、どうかしたのか？」
「ううん。あ、ここ教えてよ」
「これは――」

危ない。じっと見ていたのを気づかれたかと思った。割とどうでもいい場所を教えてもらい、鉛筆を手に取りノートを書く。あぁ、もう面倒だなぁ。また、アーサーを盗

み見る。彼はコーヒーを飲みながら国語の教科書を読んでいた。何か面白いモノなんてあっただろうか？アーサーがページを捲り、一瞬だけ挿絵を見ることが出来た。それは、とある国王の話だった。そこらへんに転がっていそうな、普遍的なお伽噺。何百年もの間、王を務めていた男は側近に裏切られた。そして、その側近は王を殺した。王が存在しなければ国は亡びる。側近が仕掛けてきた戦争により国力も落ちていたのもあるのだろうが、王がいなくなったというのが一番の理由だろう。

だから、だろうか。

そのお伽噺を読んでいるアーサーの表情は懐かしい物を見るように。そして、どこか悲しげだった。

あぁ、そっか、そうだよねアーサー。

「ねぇ、アーサー」

「ん？」

綺麗な碧色の瞳に思わず呑み込まれてしまいそうになる。だけど、今は何も映してい

ない。

目の前に居る私も。何も映していない。

「やっぱり、あの頃に戻りたい？」

「あの頃？」

「うん。昔々の、伯爵も知らない時間に」

「あぁ、それはいいな。安心できそうだ」

「……なら「だけど」」

だんだんと瞳に光が戻ってきた。綺麗な光が戻ってきた。もう、時間かな。

「過去は変えてはいけない。そこまで尽くしてきた努力が無駄になってしまう」

「そう。アーサーは強いね」

「はは。コーヒー美味しかったよ」

「それ、ティキが何時も飲んでるやつ」

扉を創る。今度は足元じゃなくて壁に。行先は、黒の教団本部の近く。

「また、会おうね」
「あぁ、また会おう。それと、宿題頑張れよ」
「っ」

頭をくしゃくしゃと撫でられた。ビックリするなぁ～。

「じゃあな」
「ばいば～い」

アーサーが扉を開けて出て行った。私も、私の仕事をしなくちゃ。不貞寝していたレロを叩き起こしてゲートを開いた。行先は、箱舟。じゃあね、アーサー。また会おうね。

アレン・ウォーカー

ヨーロッパ北部。高い断崖上に黒の教団の本部がある。ここまでの道のりは決して楽ではなかった。師匠に渡された下手くそな地図は、明らかに正規のルートでは無く、むしろ険しいルートを描いている。今度会ったら、どうしてくれようか。いや、どうにもできないか。むしろ、色々とナニかさせられるかもしれない。い、嫌だ。それだけは避けたい。どうしても避けたい！

手がプルプルと震える。そろそろ筋力の限界かもしれない。ていうか、何でこんな断崖上に建てたんだ。これじゃ、ここから出るときも入るときも一苦労どころじゃなくて、ありえないくらいの労力を必要とするんじゃないだろうか。例えば、ヤクザな人間が経営している娼館でバイトした時くらいの労力とか。

ていうか、もう本当に限界。現実逃避もこのくらいでいい。早く、速く登らないと落

ちる！

最後の力を振り絞って平らな、崖の頂上に手を着けた。

「や、やっと着いた…」

地面に思わず座り込む。へろへろだ。着ていた一張羅もボロボロで、汗もかいている。うぅ、早くシャワー浴びたい。背負っているカバンの重さで食い込んだベルトで肩が痛い。ハンカチで汗を拭いて、顔を上げた。

「……こ、ここかなぁ？ここであってるのかなティムキャンピー」

小さなボールがパタパタと飛んでいる。よく見ると、小さな手が付いている。ティムはいいよな、翼があって。ここまで飛んでいただけだもんな。そう、これは僕にとって普通。だけど、目の前の建物はお伽噺に出てきた魔王の城じゃないかってくらい怖い。夜だからだろうか？けど、これからが大切だ。そう、人間は第一印象が大切なのだ。これだけゴーレムが飛んでいるのだから、僕は見られている筈。門の目の前まで移動して、一つのゴーレムに話しかけた。

「すいませーん。クロス・マリアン元帥の弟子のアレン・ウォーカーです。教団の幹部の方に謁見したいのですが……」

１０秒が経って……３０秒が経ってようやく返答が返ってきた。それは門番の身体検査を受けろというもの。これもゴーレムだ。いきなり門の彫られていた顔が伸びて光を発した。目から。暫くして、ゴーレムの目が×の印に変わった。

「こいつ、アウトー！」
「ええ？」
「こいつはくせえーッ！ゲロ以下の匂いがプンプンするぜーッ!!こんなＡＫＵＭＡには出会ったことがねえほどなァーッ!!」
「んなっ?!」
「こいつは千年伯爵のカモだー！」

恐ろしい程に誤解されている。しかも、凄い言いようだ。ふざけるな！ゲロ以下だって!?

そ、そりゃ汗もかいてるしシャワーもここ何日かは浴びてないけど……それにだって言いようがあるだろ！これでも匂いには気を付けているんだぞ!!

「よぉ。一匹で来るたぁ、いい度胸じゃねぇか」

首の後ろがチリチリする。これは、殺気!?

上を向くと、コートを全開に開けた男が門の上に立っていた。

「ちょ、ちょっと待ってください！なにか誤解されてェ〟!!?」

風切り音と共にデカい殺気が一瞬で背後に回り込んできた。前に前転する？ダメ。門が目の前にあって前転したとしてもヤられる。それにもう間合いに入られている！回避は間に合わない。なら、イノセンス発動！

「なっ」

「痛っ？」

相手が驚いているけど、こっちも驚いてる。僕のイノセンスが斬られた。ありえない。通常兵器も、ＡＫＵＭＡの砲弾ですら傷一つ着ける事の出来ないイノセンスに、深い傷を負わせたのだ。

「……お前、その腕は何だ？」

「耐アクマ武器ですよ。僕は、エクソシストです」

「何？……おい門番！」

門番と話し出した男。だが、その注意は僕に向けられている。それに、彼の持つ刀。あれは、一体なんだ？鈍痛が続く左手。待機状態に戻しても痛みは続いている。あぁ、こんな時に彼がいたら直ぐに治して貰えるのだけど。

「チッ。まぁいい。この六幻で斬ればわかることだ」

そう言って彼は短い距離を詰めてきた。ちょっ。いきなり大ピンチなんですけど師匠ー！

……ハッ！

「ペ、ペンドラゴン元帥の紹介状！紹介状が送られている筈です!!」

目の前で刃が止まった。本当に目の前で。死ぬ。本当に死んじゃう。ていうか、怖い！この人怖いよ！

「ペンドラゴン元帥から、紹介状？」

「後、クロス師匠からも……コムイって人宛てに」

冷たい風が身体を撫でた。

あの後、何とか門を通してもらえた。神田怖い。リナリー可愛い。

「到着。ここが室長の部屋だよ」

「あ、はい」

リナリーに、黒の教団にある設備について案内と説明をしてもらった。食堂、修練場、談話室。

幾つもの階層があって、その階層ごとに何かあるらしい。らしいというのは、まだ全部を見てないからだ。後日、リナリーが案内してくれるみたい。そして今、重厚な造りをした扉をリナリーが開けた。中に入ると、白いコートを着た人が出迎えてくれた。

「はいどーもぉ。科学班室長のコムイ・リーです!」

「あ、どうも。アレン・ウォーカーです」

「いやー、さっきは大変だったね〜」

そう言いながらコムイさんは移動し始めた。どこにいくんだろう?リナリーは先に行っちゃったし。ていうか、リーって、この人はリナリーと兄妹なのかな?そして着いた部屋は、消毒液の匂いがした。医務室、だろうか。

「じゃ、腕診せてくれるかな?」

「え？」
「さっき神田に襲われて怪我してるでしょ？」
「はぁ」

左腕の袖を捲り上げて診察台の上に乗せた。うわ。捲り上げてからわかったけど、なにかに侵されたみたいに蚯蚓腫れになっていて気持ち悪い。

「やっぱり神経が侵されているね。リナリー麻酔持ってきてー！」
「はーい！」

先に行ったリナリーが奥の部屋から注射器を持って出てきた。そして注射器を僕の首に射して麻酔を注入した。局部麻酔と言われるもので、それなりに痛みになれているけど痛いものは痛い。

「発動できる？」
「あ、はい」

イノセンスを起動させる。そしたら、大きな腕と鋭い爪を持った僕の左腕が診察台の上を一杯に占領した。コムイさんはリナリーと入れ替わるように奥の部屋に入っていった。興味深そうに腕を見ているリナリーが、コーヒーを啜った。そう言えば、師匠もコーヒー好きだったなぁ。

「寄生型イノセンスかぁ。珍しいね」
「そうですか?」
「うん。教団でも、アレン君を入れて二人だけだから」
「へー。会ってみたいですね、僕以外の寄生型の人と」
「うーん。スーマンは中国に行ってるのかな。だから、当分先になっちゃうね」
「そうですか……ん?」

ビックリした。何がビックリしたって言うと、リナリーが左手を触っていることに僕が気づかなかったことをだ。そうか、もう麻酔が回ってきたんだ。所で、一体何のために麻酔を打ったんだろう。

「感触ある?」

「ないですね」
「じゃあ、目を閉じて」
「え？」
「兄さーん。アレン君の麻酔、効いたみたいだよー！」
「わかった。今いく！」

奥の部屋から出てきたコムイさんは、一抱えもあるドリルとナニかよくわからないものを手に持っていた。それからの事は、あまり語りたくもないし思い出したくもない。人の忠告は聞く物だと、身を持って学んだ。

あの悪夢から数十分後。僕はコムイさんに連れられてエレベータに乗って降りていた。左腕は吊ってあって動かせる状態じゃない。そもそも、麻酔が効いていてイノセンスを発動させたくても発動出来ないというのが今の僕だ。まぁ、教団内にいるのだから警戒しなくても大丈夫だろう。それにしても、もうだいぶ降りたというのに底には着いていない。エレベータから頭だけを出して底を見ると、そこには青白い光があるだけ。

「コムイさん。どこまで降りるんですか？」

「もう少しだよ。ここは、教団の中でも僕くらいの人間じゃないと入れない場所なんだ」
「え、じゃあ僕は？」
「それは後のお楽しみ。ほら、もう着いたよ」
「あ、ほんとだ」

緩やかに速度を落としたエレベータは停止した。青白い光が、下から射している。なかなか、幻想的な光景だった。隣に立っているコムイさんを見ると、何故か呆れた様に立っている。どうしたのだろうか。その答えは、直ぐにわかることになる。青白い光が、移動しているのだ。

も、もしかしてお化けだろうか!?
イノセンス発動出来ないよ！
でもエクソシストはこの場で僕一人だけ！

頬が引き攣っているのがわかる。そう。僕、実はお化け嫌いなんだ。大嫌いなんだ。あの人に話を聞かせてもらった時なんか、一人でトイレに行くのも怖かったくらいだ。いや、あの人の話は妙に現実味があるというかなんというか。人型の紙を千切って呪文

を唱えたら恐怖の館に引き摺り込まれ、脱出の手段は千切った人型の紙が必要？なんだそれは。そんな紙なんか直ぐに捨てる。僕なら捨てる。しかも、生き残りはたったの三人。あぁ、駄目。思い出しただけでも怖くなってきた。

「なんだ…コムイ……か」
「やぁ、ヘブラスカ。新しい子なんだ。見て欲しい」
「少…し待ってろ」
「わかったよ」

青白く発光している大きな女性は、スルリと現れてスルリと消えた。
じゃ、なくて。

「な、なんなんですか今のは!?」
「彼女はヘブラスカ。彼女もエクソシストなんだ」
「えっ!?」

驚いた。なんだか幽霊みたいな感じの人みたいな人なのに、エクソシストだなんて。

それに、彼女って言っていたから人であり女性なんだろう。けど、なんで下に行ったんだろう？

「すまない…始めよう」
「うん。お願いね」
「うえッ!?」

ヘブラスカから伸びてきた触手が僕を絡め取った。ちょっ、何してんの!?

「その子は君の目にどう映る？」
「ぐっ……そ！」
「あぁ、麻酔が効いてるからイノセンスは発動できないよ」
「なんで、こんなッ」

身体を弄られている。気持ち悪い。触手が入ってくる。気持ち悪い。なんだ、体の中が、侵されているみたいだ。

「イノ……センス！」

発動しろ。発動しろ！発動しろ発動しろ発動しろ!!

次の瞬間、イノセンスは発動した。だが、それは鋼鉄の爪ではなく、見るモノを不快にさせるナニかだった。

「あ？」

「!!…無茶を……するな」

「痛い痛い痛い！」

身体が怠い。あぁ、暗闇が迫ってくる。最後に見たのは、綺麗で大きな顔だった。

第八話

久々にホームに帰ってきた。暗い水路をゆっくりと船で移動して教団の中に入ると、まずは自室に向かった。何でホームでも鎧を着んといかんのだ。という考えの元、自室で鎧を脱いで動きやすいゆったりとした服に着替えた。ポーチには、クロスから預かったイノセンスが入っていている。本来ならば、エクソシストがホームに帰ってきたら誰かが必ず出迎えてくれるんだけど、連絡もゴーレムも無かったから出迎えもなし。あれ、少し寂しいな。一人は、寂しいもんな。うん。教団内を歩いていたって、話しかけてくる人はいない。あれ、もしかしてボッチとか？

自室から歩く事数分で目的の場所に着いた。食堂だ。昼時だから食堂には人がたくさんいる。勿論、楽しい食事の時間だしコーヒーを飲んで一息つくのもいいだろう。食堂の中は様々な職員達が話に華を咲かせていた。

だが、その会話に俺が参加することは無い。違うか。参加しないのだ。理由は簡単。話に入ったとしても必ず皆が敬語になるし、気を遣われる。そんなの、昼休みにやらせたくもないしされても嬉しくない。それに、俺と同期の人間は極端に少ない。同僚は２０人はいるのだが、それでも階級が違うだけで遠目に見られたりする。

たまたま職員が少ない窓口に辿り着くと、イイ匂いが腹の虫を鳴らした。

「あら、アーサー元帥じゃないの！」
「やぁ、久しぶり」
「本当に久しぶりねぇ。何時の間に帰ってきたの？」
「ついさっき帰ってきたばっかり」
「あらん。アタシが知らないなんて、もしかして誰も出迎えてくれなかったのん？」
「まぁ、ゴーレムも無かったからな」

普通ならゴーレムの一体や二体はぱたぱたと飛んでいる筈なのに、今日は飛んでいなかった。別に非常事態という状況でもないのは職員たちを見ればわかる。和気藹々としていて、目の下に隈を作ってコーヒーを啜りながら書類に追われている。うん。科学

班はいつも通りだ。

「はいメニュー」

差し出されたメニューを開き、目を通して行く。えーっと、どれだけ持てるかな？
いやいや、取り敢えず少し食べてから行こう。メニューの一ページ目を、上から下にかけてなぞった。あ、チョコレートパフェある。これも追加。ん？寿司もあるじゃないか！蕎麦もあるだと!?これも追加だ!!

「ここから、ここまで」
「あら～、ですよねー」
「んじゃ、あそこで待ってるから」
「わかったわん」

数十分後。アーサーの食べた残骸だけが一つのテーブルを占領していた。

カラカラと、大量の食糧が詰め込まれたカートを押してとあるフロアに来ていた。ここまでは、エレベーターで降りてきた。そう、降りてきた。もう少し降りれば水路があるフロアになる。ここはヘブラスカの間と呼ばれる、特別なフロアになっている。一般職員の立ち入りは禁止。エクソシストであろうと、コムイの許可が無ければ入る事が出来ない。じゃあ、俺はなぜ入ってもいいのか？それは、ヘブラスカが原因だ。

「おぉ……来たか…アーサー」
「また来たよヘブラスカ」

質素な椅子に座り、押してきたカートの中からサンドイッチと珈琲を取り出した。そして、これまた質素なテーブルの上にはチェスが置かれてある。そう、これが立ち入り禁止のフロアに俺が入っていい理由。

「さぁ……やろう」
「また、俺が勝つよ」

ヘブラスカの話し相手とチェスの相手になる。それが条件として前室長が認め、ヘブラスカ自身も認めたのだ。だから時折、いや頻繁にここに訪れている。だって、喋る相手はいるけど忙しそうにしていて話しかけられない。

駒がボードをコツコツと鳴らす。それと咀嚼音。カートに積んであった食料はもう殆どが無くなっていた。食後のコーヒーに加えて、喉が渇くといけないからと持ってきた水はたっぷりとある。そんなアーサーを見ていたヘブラスカは溜め息を吐いた。

「よく食べれるな…アーサー」
「んぐんぐ……まだ入る、かな」
「…チェック」
「……ぬ」
「チェック」
「く……」
「…チェック」

「……負けたよ」

ヘブラスカのクイーンとポーンが俺のキングを追い詰め逃げられない状況になった。詰んだ。もう逃げ切れない。途中までは追い詰めていたのだが、だんだんと盛り返されついに負けたのだ。久々にチェスで戦ったのだ。俺は、日々を世界を飛び回っているのだが、ヘブラスカはここに留まり暇な時間はひたすらにチェスやコムイとお喋りを繰り広げているのだ。仕方ないと言えば仕方ないのだが、これでも男の子だ。悔しい。悔しいけど、チェスは一日一回だけと決めた。だから再戦は明日だ。

「…久々に勝った」
「もう俺より強いんじゃないか?」
「コムイに……勝てるヤツが言う…台詞ではないな」
「あれは偶々だよ」
「むん…」

可愛らしい効果音が付きそうなくらい、小さな衝撃が頭を襲った。青白い手が頭をはたいたのだ。何と言うか、図体に合わない攻撃は非常に可愛く見えてしまうだけに吹い

てしまった。それが面白くないのか、ヘブラスカは幾つもの触手を操り四方八方からの攻撃を繰り出した。

「ちょ、コーヒー零れる」
「…ふん……ん？」
「んー？」

まるで猫パンチを受けているみたいな感触に萌えながら上から聞こえてきた声に目を向けた。エレベーターの上からコムイがこちらを覗き込んでいたのだ。なんの用だろうか？

「少し…待っててくれ」
「おう」

ヘブラスカが立ち上がった。それだけで見上げる程の高さがあったのに、ヘブラスカはそこにいた。やることが無くなってしまった。ポケットから煙草を取り出し火を点ける。もう一度、上を見るとコムイが手を振ってきた。それを適当に返しながら、時計

を見るとそろそろ消灯時間に近かった。

「すまんな…今日は……ここまでだ」

「わかった。また明日な、ヘブラスカ」

「あぁ」

食い散らかしたものを片付けながら上を見ると、そこには！

触手に弄ばれているアレンがいた!!

「はぁ？……あぁ？」

あぁ、そうか。もうそんな時期か。アレンの入団。それは、原作が始まることを意味している。ここから先は色々なことが起きる。なかなかハードなものだが、それでも今は目の前のアレンを見ておこう。こういったシーンにはなかなか見ることが出来ない。眼福物だといっておこう。

ヘブラスカ!?それは流石に不味いんじゃないのか?アレンのボタンが外れて胸が露わになって、真っ白な膨らみと桜色の突起物が見えてしまっているぞ!?

いいのか?いいのかー。アレンが女でもいいのかー。そーなのかー。

その後、自室に戻ってからアーサーが自己嫌悪したのは当たり前の話。

アーサーが如何様にしてアレン♀を知ったか

アレは確か、クロスが弟子を見て欲しいと言ってアジアのどこかに行った時だった。明らかに高級感漂う宿屋に足を踏み入れた。

「よおアーサー。こいつがアレンだ」
「アーサー・ペンドラゴンだ」
「あ、アレン・ウォーカーです。よろしくお願いしますペンドラゴン元帥」

俺は少し感動していた。Ｄ，Ｇｒａｙ　Ｍａｎの主人公のアレン・ウォーカーに会えたことに。そして同時に、ひどく脆いものだとも感じていた。余りにも小さい。まるで女の子の様だ。そうか、この子がこれからあの苦難を乗り越えていくのか。

「あっ、えっ」

「ん？あぁ、ごめんね」
「……」

ついつい頭を撫でてしまった。俯いているアレンを尻目に、俺はクロスから煙草を受け取った。窓際まで移動して、ゆっくりと煙草を吸う。今日の天気はなかなかいい。

「アーサー。こいつと戦ってやってくれ」
「……なに？」
「いやな、俺が相手だと近づくことも出来ずに終わるからな。話にならん」
「ひ、酷いです師匠」
「事実だろバカ弟子。俺の弾丸程度、避けて見せろ」
「あんなの無理ですよ！」
「確かにクロスの弾を避けるのは難しい」

うん。難しい。なんだよ音速って。しかも追尾能力があるなんて、どこのリップバーンだ。あれは旦那の全能力値チートがあったこそ勝てた相手であって、間違っても俺が勝てる相手ではない。しかも、弾数は六発。勝てなくても仕方ないね。

「ハッ、俺の弾丸を切り裂いといてなに言ってんだか」
「切り裂いて!?」
「いや、あれはたまたま銃弾の軌道にカリバーがあっただけ」
「それが出来りゃエクソシストは苦労しねぇだろうが」
「す、凄いですねペンドラゴン元帥！」

手を胸に当てて、まるで花が咲いたように笑顔を見せながらアレンはコートを羽織った。

俺がここに来た理由は、アレンの修行に少し付きあって欲しいとクロスに言われたからだ。同じ相手ばかりでは――中距離主体のクロス――ＬＥＶＥＬ２以上の近接攻撃に対応できないからだろう。原作では労働力として扱っていたクロスだが、存外。ちゃんと弟子の事を考えてやっているんだな。

「テメェ、何ニヤニヤしてやがる？」
「いやぁ、アレンは愛されてるなって思ってな」
「え、ええっ!?」

「どういう意味だ」
「いやいや」

珍しく、本当に珍しくクロスをからかいながら近場の開けた場所へと移動した。

彼を見た感想は、不思議な人。カッコイイ人。師匠に面と向かって啖呵を切れる人。僕の頭を撫でてくれる優しい人。そして、戦闘訓練に入った感想は、強い人。ただひたすらに強く、そして妥協を許さない人だった。彼の、アーサーの剣は真っ直ぐでありながら速く鋭く、そして重い。僕が受け切れる限界を見抜きエクスカリバーを振りかざしてくる。なんとか受け切っていたのだけど、後でクロス師匠に聞くと例えイノセンスで鋼鉄を誇る左手でも真っ二つになるそうだ。

「うぅっ。やっぱり訓練になると厳しくなるのかなぁ～」

師匠から聞いた話では、一週間程アーサーはここに留まり僕を鍛えてくれるそうだ。それが嬉しいのか嬉しくないのかは、非常に微妙なラインだが今は脱力してもいいだろう。なんたって、お風呂に入っているのだから。

――ほぅ

息を吐くと、全身の疲れが抜けていく気がして楽しい。

――ほぅ、ほぅ

全身にある脱力感と筋肉痛は、万遍なく体を使った証拠だ。剣と左手では、多くの違いがあるのにこんなにも効率よく鍛えられるなんて思わなかった。そして風呂に入ったら筋肉を解すようにとも言われた。こうすれば、明日の筋肉痛が幾分マシになるらしい。

リラックスしながら、また息を吐いていると脱衣場で物音が聞こえた。師匠？そんな

馬鹿な。

あの人は同意が無ければそんなことはしない男だ。となれば……。そこまで考えて、心臓が不自然に鼓動した。ア、アーサー!?確かに宿が高いだけあって風呂も広く二人なら余裕で使えるだけの広さがあるにしても、って僕はナニを考えているんだ!?

「あ、アーサー!」

「あー、疲れた……な?」

無駄な思考。だが、その思考は余りにも長くアーサーが浴室に入ってくる時間を稼いでしまったようだ。目の前のアーサーは、呆けた顔をして固まっていた。

「お、女?」

その言葉に反応してイノセンスを発動してしまったのは仕方ないと思う。旅の、旅費やら宿泊費やらで金に困り、男に交じって仕事をしているのは事実で、余り女を見せない様に胸にサラシを巻いていたのは事実だ。事実だが、それはあんまりだよ!

僕だって、僕だって女なんだー！

「クロス・グレイヴ」

「ちょまっ」

ていうか見るな防ぐな忘れろー!!

僕が想像していたよりも、これっぽっちも色っぽくもないこの展開はアーサーに取り押さえられてというか、僕が湯あたりを引き起こして幕を閉じた。あぁ、それにしてもアーサーの体はバランスが取れていて女の僕でもイイと思ってしまう程だ。きっと、苦労したに違いない。だけど、それはそれ。これはこれ。目の前に並べられた豪華な食事を見て、これなら許してもいい。師匠、なに話してるんですか？

そうですか、バストの話ですか。……A程度？ハハッ。アーサー、何を話しているんですか。

「店員さーん。これ、ここからここまで追加でお願いします」

この後、僕の注文と同じように注文しているアーサーが印象的だった。ちぇっ。まだ成長期だもん。

アーサー×アレン×リナリー

コムイ・リーは教皇のみが使う事を許された判が押された一通の手紙を前に、困り果てていた。教皇から直接の手紙を受ける事はこれが初めてではない。大きな方針が内容の手紙であったり、資金面についての手紙を中心にやりくりしていた。まぁ、これはコムイに宛てに送られた手紙と言うよりも黒の教団に送られた手紙である。が、これは違う。

「う～ん。どうしたものかな」

僕が内容を見て判断してもいいんだけど、この手紙はアーサー・ペンドラゴン宛に送られてきた手紙だ。つまり、アーサー個人に宛てて教皇自らが送ったことになる。こんなのは極めて異例だ。一個人に、ましてや王族でもなんでもないエクソシストに宛てて送られてきたのだ。疑いたくもなる。だけど、まぁ彼自身がここにいるのは昨日確認し

たから呼び出せば済む話か。

「……美味い」

リナリーに淹れて貰ったコーヒーを啜り、チョコレートケーキを一口食べた。苦みと甘みが口の中に広がる。視線を手紙から班員の皆に向けると、彼らもケーキを食べていた。コーヒーも啜っている。タップなんかはホールごと食べている。あぁ、駄目だ。見ているだけで気持ち悪くなってくる。

「あぁ、もう死にそう」
「判子押してから死んでください室長」
「え～んリーバー君が苛めるよー！」
「仕事してください室長。リナリーにまた怒られますよ」
「よしやろう！今すぐやろう!!」

なに？

リナリーが絡めば仕事が早い？当たり前じゃないか！あんなかわいい子が待ってく

れているのに仕事が残って会いに行けないなんて耐えられるわけないじゃないか!!なんだか呆れているリーバーを尻目に、僕は書類を片付けるために判子とペンを持った。

「あぁ、リーバー君。これペンドラゴン元帥に渡しておいてくれないかな?」
「わかりました室長。これ、何すか?」
「んーと、教皇様からの手紙」
「うえっ!?そんな大事なもん俺なんかに渡さないで下さいよ!」
「まぁまぁ、早く行ってきて」
「くっそう。この仕事が終わったら寝てやる」
「あと、どんな答えに関わらず一度ここに来て欲しいとも言っておいて。それじゃ、よろしく〜」
「わかりました。サボらないでくださいよ」
「はいはい」

大事なものを抱えるようにリーバーは部屋から出て行った。いや、確かに大事なものだけどそこまで厳重に保護しなくてもいいんじゃないかな?まぁ、別にいいけど。

その部屋は、綺麗に整頓されていた。本棚には幾つもの本が所狭しと並べられ、一つしかない窓の傍にはテーブルがある。テーブルの上には読んでいた本と灰皿、そして水の入ったコップが置いてあった。皺ひとつなかったベッドは、私が座ったことで皺が出来ていた。このベッドは質素に見えて実は高級品だ。ハンガーに掛けられた金色のコート。そして、その隣に丁寧に置かれている鎧とホルスターに入ったコンテンダーが掛けられてあった。

ふと視線を窓際に座るアーサーに向けると、彼は微笑んだ。その体面に座るアレンは逆に、苦虫を噛んだ様に額から汗を垂らしていた。

「……か、勝てない」
「いかさまはしてないよ?」
「わかっています。けれど、何ですかその引きの良さは」
「うーん。それじゃあ他の遊びでもする?」

「はい。今度はリナリーも一緒に何かしましょうよ」

アーサーとアレンはポーカーに興じていたが、一向にアレンが勝つことなく終わってしまった。勿論、賭けていたが最後にはアーサーが掛け金を全額アレンに返していた。これが、大人の余裕なのかな？

「あ、じゃあＴｒｕｅ＆Ｄｕｓｔなんてどう？」
「いいですね。アーサー元帥はどうですか？」
「俺もそれでいいよ」

アーサーが席を立ち、窓を開けて煙草に火を点けた。まるでウェイターの様に左手で椅子を引いた。

「リナリー、此処に座りなよ。俺は立ってていいからさ」
「いいの？」
「はは。女の子を立たしていたら、それは男じゃないよ。クロスでも座らせるさ」
「そうですね。師匠も、僕を立たせるってことは滅多にしませんでした」

そこから始まるゲームは、終始アーサーの独壇場で私とアレン君の勝ちは殆どなかった。どれだけ強いんだこの人は。少し呆れてしまう。呆れると言えば、目の前で項垂れるアレン君と優雅にコーヒーを飲んでいるアーサーの食事風景もそうだ。あの量はありえない。そしてあの量を食べて太らない方がおかしい。物理的におかしい。どうして普通の物を食べた後に甘いものもあれだけ食べれるのだ。というよりも、そのカロリーはどこにいった!?私なんか計算して食べているのに。食べた後も訓練をして汗を流しているのに!

「ど、どうしたんですかリナリー。あ、お腹でも空きましたか?僕も少しお腹が空いてきました」

「……それじゃあ、少しだけ運動して何か食べに行こうか」

「あ、いいですね。久しぶりにしましょうアーサー元帥」

「私も行ってもいいよね、アーサー」

そうして移動した修練場には誰もおらず、私達三人の貸切だった。皆、一度自室に帰り動きやすい服装に着替えている。アレン君はノースリーブのシャツに長ズボン。

アーサーは7分丈のズボンにシャツ。私はハーフパンツに半そでと、かなり動きやすい服装だ。

「それじゃあ、俺とやる？」

「アレン君。私が先にやってもいい？」

「あ、いいですよ。僕は食堂に行って飲み物を貰ってきます」

そう言い残してアレン君は修練場から出て行った。アーサーは準備運動をしている。私もそれに習い準備運動をした。ゆっくりと時間をかけて準備運動を終えると、次は模擬戦の始まりだ。アーサーは中に鉄が仕込まれた西洋剣の木剣を手に取り数回、振ると上段に構えた。偶に、こうして訓練に付き合ってもらっているが一度もアーサーがイノセンスを発動したことは無い。それはつまり、イノセンスを発動させなくても勝てるということだ。

「ダークブーツ、発動」

ふわり、と空中に飛び上がる。この修練場は、他の二つと違い天井が高い。殆ど私専

用に造られたといっても過言ではない修練場だ。それ故に、高く飛び上がった。こうでもしなければ、直ぐにでもアーサーに地上に落とされてしまう。アーサーは一歩も動いていない。じゃあ、遠慮なくいかしてもらう！

「でぇあ！」

「また速くなったな、リナリー」

高度からの垂直蹴りを難なく受け止めておいて何を言っているんだ。普通の人ならミンチになっていてもいかしくないのに。限に、アーサーの足元は深く抉れているし木剣にだって罅が入っている。だけど、その木剣は一瞬にして視界から消えた。

横からの衝撃。視界に砂が見えて、初めて吹き飛ばされたのだと理解した。見えなかった。妙に痺れがある右足を庇いながら立ち上がると、アーサーは木剣をその場に突き刺し虚空に手を振った。胸が高鳴る。そうだ。これが、これこそが私が待ちわびた光景だった。言っておくけど、決して私は戦闘狂ではないし、痛いのは大嫌い。だけど、これは違う。背筋がゾクゾクする。

「ふふっ」

虚空から取り出したのは、彼の剣。黄金に光る一振りの剣。どこかの博物館に飾ってあってもおかしくない装飾が施されたそれは、確実にＡＫＵＭＡを屠る剣だった。確かめるように何度か振う。彼は、構えない。それは、構えても無駄という事だ。私も理解している。けど、まぁイノセンスを出させたことでよしとしよう。

「なるべく手加減はするけど、危なくなったら全力で逃げてくれ」
「うん。行くよ、アーサー！」
「こい、戦ってやる！」

身体が軽い。
憧れの、私の目標に向けて踏み出す。
こんな気持ち、初めて。

だけど、そんな気持ちは一瞬で。彼が剣を抜いたということは少なからず本気になったという事を忘れていた私は、一瞬にして詰めた筈の間合いを逆に利用された事も気づ

かずに伸びてきた腕に反応することも出来ずに地面に組み伏せられていた。何が起こったか理解できない。仰向けになっているから、アーサーの表情は窺えないけれど。きっと、何時もと変わらない表情をしているのだろう。

汗が垂れた。気が付けば、髪の毛が額にへばり付いていた。気持ち悪い。ほんの１０分にも満たないのに全身から汗が噴き出していた。

「前より強くなったな、リナリー」

私の上からどきながら、アーサーが言った。嬉しい。けれど、やっぱり強いと思う。彼は、どちらかと言えばパワータイプのエクソシストだ。私はスピードタイプ。だというのに、正確に私を捕らえているし、なにより剣の一振りが早すぎる。目で追えない。まぁ、これは元帥の皆に言えることなのだけど。

「はぁ、強すぎるよアーサー」

「はは。それは年の功ってやつだよ」

「私と8歳しか変わらないよ」

「8つも違うんだよ」

むう、八歳しか違わないじゃない。けど、まぁ私の知らない事も知っているし、年上か。

――年上かぁ

一人で悶々と考えながら、鍛練場にあったタオルで汗を拭くとついついシャワーを浴びたくなってしまう。鍛練場の隅に置いてあるベンチに腰掛け、同じように座るアーサーを見ると彼は何かを考えていた。顎に手を当て、イノセンス――エクスカリバー――を見ている。綺麗だ。素直にそう思う。どれだけ見ていても飽きる事もない。その剣は、魅力的だった。神々しいと言うのだろうか。

「ねぇアーサー。もう一回、やろ?」

「……」

もう一度、勝負をしたくて。けど、アーサーが目を見開いて固まった。なぜだかわか

らないけど、本当に時々こうして目を見開いて固まるときがある。けど、それも一瞬で聞こえてきた足音の方を向いた。アレンだ。なにやら大きな袋を背負って笑顔で歩いている。頬にクリームを着け、手にシュークリームを持ちながら。

うん。少しだけ、予想していたけど外れて欲しかったかな。その袋の中身、全部が食べ物なんでしょ？私の目の前で食べるんでしょ？美味しい肉まんとか、甘いパイとか。

……。

「あ、アーサー！」
「ん？」
「もう一回やる！行くよ!!」
「うえ!?」

アーサーの手を掴み修練場の真ん中に連れて行く。後ろからアレンが何か言ってるけど、もう無理。私も食べたいから、運動するの！

任務前

大運動会とも言えるであろう模擬戦を数十と繰り返したころには、リナリーとアレンは汗だくで服が体にへばり付き大変だった。リナリーはスレンダーな体型で、アレンは着やせするタイプというかサラシを巻いているというか。しかし、あのリナリーの蹴りは駄目だ。骨が軋む。しかもハーフパンツみたいな物を履いてるから、色々と駄目だ。中身が見えます。もう一回やろう?とか、もう誘っているとしか言えない。うっぷす。

手は出せないんだけどね!!

「聞いていますか?ペンドラゴン元帥」
「……聞いてるよ?」
「なんで疑問形なんですか。はぁ、もう一度説明しますよ」
「ごめんね」

俺は今、コムイの執務室に居る。コムイの執務室は何時も散らかっている。机の上は最低限の執務が出来るだけのスペースはあるが、広い部屋の中は紙束で埋め尽くされている。分厚い本も積み重ねられていて今にも崩れそうだ。そんな部屋で、俺はコムイと向かい合って座っていた。ゆったりとソファーに座りながら、渡された手紙を見る。差出人は、教皇だ。内容は、中央庁に取り敢えず来いとの事。一体なんだと言うのだろうか。この前はクロスが呼ばれていたし、その前はフロアさんが呼ばれていた。あぁ、この前の時に聞いておくべきだったかな。

「ペンドラゴン元帥には、中央庁に行ってもらった後は通常通り任務に着いて貰います」
「持っていくイノセンスは？」
「５つでどうかな」
「５つでいいのか？」
「はは。御冗談を」

その御冗談をってのは、お前には出来ないよハァ！みたいな感じなことなのか？いやまぁ、俺も致命傷――背骨を砕かれたり心臓を潰されれば――を負えばある程度、動く事も出来ない。だけど、まぁ少し前まで１０近いイノセンスを持っていたから少しだけ

悔しい気持ちがある。いいや。安心感の方が大きいかな。

サイドテーブルに置かれたコーヒーを啜る。もう一度、手紙を見る。やっぱり、教皇直筆で、しかも彼女だけが持てる指輪を使って。しかも中には葉巻が一本、入っていた。いい葉っパ使ってやがんなァ。ブルジョアーッっうのか？匂いで解る。クロスも偶に吸う程度の代物だ。俺も、稀に吸うくらい。自ら買おうとは思わないが、あれば吸う程度の認識だ。まぁ、あるのだから吸ってしまおう。

コムイに許可を貰い、葉巻に火を点けた。甘く、上品な香りが執務室に漂う。やっぱり、いいなぁ。煙で輪を作りながら、そう思う。向こうに着いたら、何本が貰ってこようか。それもいいかもしれない。くれるだろうか。バカ高いワインか、一級品の剣か。うん、ワインでいいかな。確か部屋に何本かあった筈だ。

「ペンドラゴン元帥、出発は今から三時間後になりますので、そろそろ支度を初めてはどうでしょうか」

「……三時間後？」

「えぇ。先ほど言いましたんですけど、もしかして聞いていませんでした？」

「はっはっは」
「もう。お願いしますよ元帥」

まだ半分以上も残っている葉巻の火を消して、自室に戻ることにした。服装は何時もの団服で構わないのだけど、ワインを選ばなければならない。それに、彼女に会いに行くのに汚れた武装じゃ失礼にあたる。綺麗に磨き上げなければ。コムイに一礼して、執務室を後にした。

――アーサーの自室――

丁寧に置かれていた軽鎧を磨く。白銀に輝く鎧は、見るモノを魅了する不思議な魔力を持っていた。胸当て、手甲、脚甲。その全てがコムイが作ってくれたもので、その硬さと柔軟さは計り知れない。変態に技術を持たせた結果がこれだよ!と言いたくなるような性能だ。団服も、新しい物をクローゼットから取り出してベッドの上に置いてある。隅から隅まで鎧をピカピカに磨けば、次はホルスターに入ったコンテンダーの整備だ。バレルを外してバネを取り出して、中に溜まってある煤を綺麗に取り除く。コンテンダーの整備は比較的に簡単だ。

机の引き出しの中に入れてあったケースを取り出し、そこからライフル弾を一つ手に取った。普通の銃弾に比べて明らかにデカく異質なそれは、とても心を刺激します。本当にありがとうございました。コンテンダーも、単発式で中折れ式とか、心を擽りすぎてついつい詠唱してしまいそうになる。衝動を抑えながら、コンテンダーに装填。これでコンテンダーの整備は終わり。ホルスターにコンテンダーを入れてから、弾丸ベルトにも詰め込んでいく。持ち歩ける弾数は、装填済みの弾丸を含めて４８発だ。これもまた、心を擽られる。ハッ、これはあれじゃないだろうか。心が躍る！というやつではないだろうか!?

「どこぞの征服王だよ」

部屋で一人、笑いながら装備の確認をして後は身に着ければ完了というところで手を止めた。まだ時間はあるから、そろそろワインを選ばなければならないからだ。椅子から立ち上がり、小さなワインセラーの扉を開けてどれにしようかと迷う。ただただ高いワインじゃ駄目だ。香り高く、味わい深く、高貴でなくては。

「……う～ん」

だからこそ、悩む。もういっそ、花束だけでいいんじゃないだろうか。意外性を突いてバイオネットなんてどうだろうか？……俺が斬られて死ぬか。彼女、人類側最強戦力の一角じゃないだろうか。それくらい強い。イノセンスも持っていないのに、本当に強いのだ。だけど、女性なのだから品物は慎重に選ばなければ男ではないだろう。とか考えつつ、もうどーでもいいやと思考の結果にお落ち着き、一番上にあった赤ワインを一本手に取り対ショック加工が施された筒に入れた。

「ふう。準備完了」

時計を見ると、出発までの時間は後1時間も残っていなかった。予想以上に、装備の整備とワイン選びに時間を取られていたようだ。教団の中で着ていた動きやすい服から着替える。中央庁に行くのだから、正装に着替えなければならないとか、そんな所は無い。俺たちエクソシストにとって、団服こそが正装であり聖装なのだ。とか言ってるけど、聖装ってのはヘブラスカに聞いたこと。鎧を身に着け、その上から団服を着れば準備は出来る。だけど、それを終えてもまだ時間は４０分以上もあった。だから、まだ

残しておいた葉巻に火を点けた。甘い匂いが部屋に漂う。こればっかり吸っていたら普通の煙草は吸えなくなるんじゃないだろうか。

ふと、とある曲を思い出した。何時聞いても燃え上がる曲。所々忘れてしまったけれど。そもそも、あれだ。原作が熱い。プレイしていると、熱くて男泣きしてしまった。なんというのだろうか。日本人ならば、誰でも心の奥底にある日本を思う心を刺激されたというか。胸の奥から込み上げる感情に涙した。主人公が数多の苦難を乗り越え、ついに最終決戦の最後の場所に辿り着いたかと思えば、生き残りは僅か４人。突入した時の人数が、主人公を含め僅か８人。二人は敵に囲まれ自爆し、一人は無残に食い散らかされ、一人は道を切り開くために命を落とした。一人は、主人公が放った大出力砲撃で消滅した。そして、最後の一人は限界以上の力を使い人間として死んだ。そして主人公も、最後には世界から消えた。

「はは」

「どんだけ絶望してんの!?最終的に突入組が一人だけしか生き残ってないってどういうこと!?」とか説明して見せるけど、これエロゲなんだよね。Ｒ―１８。まぁ、エロいと

いうかグロでＲ―１８になっちゃたんだよね。エロは本当におまけ。最近じゃ、エロシーンがおまけになってるだけ。というか、エロいのなくなったし。もう出来ないけどね！

　こうしてゲームに思いを馳せていると、何時の間にか時間は集合時間の１０分前となっていた。思いは馳せていない。ただの妄想だ。あの絶望的な世界にオリジナルキャラを入れて、世界を楽しむ。チートは余り好きじゃないから、生まれだけ上流階級ってことにして記憶もそのままがいいな。ただしＸＭ―３は無し。どこまでも絶望で往こう。その世界を戦った衛士として描こうと思う。こういう妄想って本当に楽しいよね。

　座っていた椅子から立ち上がり、コートを着て地下に向かった。そこが旅の始まりであるからだ。エレベーターを使い、途中で寄り道をしながらも地下の用水路に辿り着くと、そこには既にコムイとリナリーがいた。どうしてリナリー？

「時間通りですね、ペンドラゴン元帥」

「遅れたら彼女に何て言われるかわからないからな」

「ははは。そういう事なら、船でこれを読んでおいて下さい。予定表です」
「ありがとう」

コムイからメモ用紙を貰い受け、それをポケットにしまい込む。ふとリナリーを見ると、胸に抱きしめた風呂敷を前に出した。なんで風呂敷？と疑問に思うが、その後に漂ってきた甘い匂いに頬が緩む。

「これ、私が作ったの。船で食べてね」
「うん。ありがとう」

少し照れながらも、笑顔で手渡ししてくれた。ええ子やリナリー。こういうことが出来る女の子って本当にいいよね。こんな嫁さん欲しいね。こう、何て言うのかな。夫婦になったらきっと、色々な意味で素晴らしい嫁さんになるんだろうな。

「じゃあ、行ってくるよ」
「行ってらっしゃいませ、ペンドラゴン元帥」
「行ってらっしゃい、アーサー」

コムイが頭を下げ、リナリーひらひらと手を振りながら、送ってくれる。それに二人が見えなくなるまで応え続けた。

早速だけど、食べようかな。

１１．５話

――リナリー・リー――

コーヒーが入ったステンレス製のポットと、兎と剣の絵が描かれたマグカップを二つ持ち廊下を歩く。目的地はアーサーの部屋。まだ暫くの間は本部に留まるとの事で、久しぶりに二人で話がしたかった。アレンちゃんは、嫌な顔をした神田と任務に往ってしまった。本部には最低でも一人の動けるエクソシストが常駐することが決まり。だからアーサーがいるのだろう。教団の中でも最強戦力の一角を担っているから、彼がいるだけで本部は安心できる場所になる。元々、安心できるのだけど雰囲気が違う。看護班の皆は何時もより雰囲気がやわらかい。女性が中心な班だけに、そういうことなのだろうと思うけれど、一番の原因は班長の婦長が原因だろう。厳格であり年齢もある女性だけど、何時も背筋がしっかりとしていて私達とは違う第一線で戦う人だ。そんな婦長が、笑っているのだ。何時もより雰囲気が幾分か柔らかいと言った方がいい。婦長がそんなのだから看護班の空気は柔らかかった。

「ふんふ～ん」

私も人の事は言えないのだけど。なによりの証拠が両手にあるポットとマグカップだった。それに鼻歌も歌っているし、心なしか歩くスピードも速い。何を話そうかな。コムイ兄さんの愚痴？アレンちゃんの事？それとも仕事の事？とにかく、早く行こう。そうして歩くスピードを上げてアーサーの部屋に辿り着いた。深呼吸をして扉をノックしようとした所で、声が聞こえてきた。これは、歌？

驚いた。なんの歌だろう。アーサーが歌うものは、誰も知らない。珍しさもあって私たちは教えて貰ったりしているけれど、これは聞いたこともない歌だった。少し悪い気もするけど、扉の前で歌を聴き続きたいと思ってしまった。

そして後悔した。私からしたら、これは送る歌に聞こえてしまう。死者を送る歌。昔を思い出す歌。アーサーと同期のエクソシストは、いない。いないと言う事は、死んだか行方不明になったということだ。「闇の時代」孤立無援で、戦い続けた。そんな話を聞いたか、見たことがある。あれは確か、どこかの丘だったか。白銀に輝いていた鎧は砕

け散り、剣にも罅が入っていたらしい。敵は強大で群。アーサーが倒れれば、後ろにいた誰かが死んでいたらしい。逃げればよかったのに、アーサーは逃げなかった。

「戦友は死をも恐れず」戦友が隣にいたのだろうか。熱いナニカが胸から込み上げてきた。今でこそ、アーサーは強力無比な力を誇っているが、昔は違う。誰だってそうだ。比べる事が烏滸がましいけど、あのクロス元帥も昔は無茶をしていたらしい。一緒に風呂に入ったアーサーが言っていた。服の下には傷があるらしい。大きな傷も、小さな傷も。

　気付けば、私はアーサーの部屋から離れていた。どうしてかは、わかっている。けど、それを言葉にすることはない。無粋だ。失礼だ。記憶に留めておけばいい。覚えておけばいい。そして、時が来れば弔ってやればいい。それを今、アーサーがしているのだろう。私はそれを知らないから。誰を弔っているのか知らないから。

「あ～あ。無駄になっちゃた」

　厨房に戻って、マグカップにコーヒーを淹れて飲む。うん、おいしい。けど、どうし

ようかな。アーサーの部屋には行けなくなちゃたし、コムイ兄さんは忙しそうにしている。……。あ、そうだ。パイでも作ろう。唐突に。任務に行くらしいから、その道程で食べて貰えばいいだろう。よく食べる人だし。

――地下用水路――

作ったアップルパイを、神田から貰った風呂敷を使って包んだ。久しぶりに作ったから味は保証できないけど、美味くできたと思う。隣に立つ兄さんも、鼻をひくひくさせていた。

「それ、一口くれない？」
「だ～め。あげないもん」
「ちょ、ちょっとだけ」
「ふ～ん、だ。もっと前に言ってくれればよかったのに」
「僕だって今日の朝に手紙を見せてもらったんだよ！」
「む～～」

実は、アーサーの部屋に行く前にコムイ兄さんの部屋に行っていてアーサーが任務に行くと言う事を知っていたのだ。だからアーサーの部屋に向かったのだけど、彼があんな状態だったからお喋りすることも出来なかった。それがコムイ兄さんが原因じゃないけど、少しこういうのが楽しい。あぁ、兄さん。後で作ってあげるから落ち込まないで。自然と笑みがこぼれる。

「それ、何持ってるの？」
「これかい？」

コムイ兄さんの持つメモを覗き込む。掌サイズのメモに、所狭しと挨拶する人の名前が書いてあった。……。そういえば、アーサーは自分から積極的に動く人じゃなかったなぁ。近くに居れば会話を繰り広げるけど、遠くの、わざわざ自分で動いて行かないとなればアーサーは動かない。面倒とか、そういうのが大半で後はただ単純に嫌と言っていた。知らない人間とわざわざ喋るなんて意味があるのかと。

「中央庁に行くからね。少しくらいはあいさつしないと」
「中央庁って、今度はアーサーなの？」

「今回はアーサーだね。何回か前にも行ったことがあるみたいだけど、ね」
「兄さんは知らないの？」
「僕の所に直接手紙が来たのは初めてなんだよ」

その時、誰かが階段から降りてきた。アーサーだ。時計を見ると、予定時間の五分前。性格が表れている。真新しい金色の装飾が施された団服。その団服から覗く磨き上げられた白銀の鎧は、騎士の様だ。肩から吊り下げたカバンには、恐らくアルコールの類が入っている筈だ。アーサーの部屋には珍しいワインセラーがあって、その中身も珍しいみたい。私は、お酒を嗜む程度にしか飲まないからわからないけど、クロス元帥も珍しがっていたくらいだ。あのお酒の大好きなクロス元帥が、だ。

「時間通りですね、ペンドラゴン元帥」
「遅れたら彼女に何て言われるかわからないからな」
「ははは。そういう事なら、船でこれを読んでおいて下さい。予定表です」
「ありがとう」

兄さんから受け取ったメモを見てうんざりした様な表情をした後、私を見て顔を綻ば

せた。ううん。きっと、パイの匂いで笑ったんだ。そうに違いない。

「これ、私が作ったの。船で食べてね」

「うん。ありがとう」

少し恥ずかしいけれど、ちゃんと受け取ってくれた。隣で兄さんが歯ぎしりしているけど、知らない。ちょ、アーサーもそんなに私を見ないで。あぁ、私の顔、ちゃんとしてるかな？真っ赤になってたりしないよね。アーサーが一度、何かに頷くとゴンドラに乗り込んだ。殆ど水面は揺れる事はない。

「じゃあ、行ってくるよ」

「行ってらっしゃいませ、ペンドラゴン元帥」

「行ってらっしゃい、アーサー」

兄さんが頭を下げている横で、私は手を振る。それにアーサーも応えてくれた。これから、また一年は会えないのだと思うと少し寂しい気もするけど、それもまたいい機会かもしれない。次の模擬戦は負けないんだから。それから、もっとお喋りもしたい。

あぁ、どこかに買い物に行くのもいいかもしれない。そんな事を考えながら、アーサーが見えなくなるまで手を振り続けた。

――厨房にて――

「ジェリー、リナリーがパイ作ってくれないんだよう！」
「あぁ、そう。それは残念ねん」
「ジェリー、冷たくない？」
「温めて欲しいのなら、ここに逃げ込まないでちょうだい！リーバーちゃんが探してるわよ！」
「わー、ジェリー最高ー」

中央庁

――バチカン・とある執務室にて――

黒の教団から数日。船から馬車から汽車、時には徒歩で進みバチカンに入国したアーサー・ペンドラゴンは今、ソファーに座っていた。ようやく一息つけたといった感じだ。部屋には、窓から射しこんでくる太陽の光で眩しいくらいに文字通り輝いている。磨き上げられた机とか、金や銀で装飾された様々な家具が。いや、ここは公的な執務室な筈なんだけどこの部屋の主が好き勝手やって私室にしてしまっている状態だ。甘い匂いが漂っている。俺が吸っていた葉巻と同じ匂いだ。

その出所は俺の口元と、執務用の机と同等クラスの椅子に座ったインテグラルの口元だ。インテグラに、ここに来て１０ダース程、貰ったのだ。何と言うか、よくしてもらってる。そうそう会う事の出来ない役職同士ではあるが、会えばその度に一緒に食事をし

たり酒を飲んだりで会話を楽しんでいる。褐色の肌と金髪と青い瞳。豊かに育ったナイスバディの持ち主である。因みに、彼女のフルネームはサー・インテグラル・ファルブルケ・ウィンゲーツ・ヘルシングである。長い。長い上に委縮してしまいそうになる名前だ。これ、雌豚とか言ったら彼が出てきたりするのだろうか。

「久しぶり、インテグラ」
「遠路遥々ご苦労だったな、アーサー」
「いや、そうでもなかったかな」
「謙遜か？似合わんな」
「ははは。あ、これどうぞ」
「む、ワインか。ありがとう」

彼女の手元が止まったのを見て、ソファーから立ち上がりワインを渡した。インテグラがワインに気を取られている内に書類を盗み見ると、なにやら予算関連の物の様だ。なになに……ヘリコプター？この時代に、そんな代物があるわけがない。とか言いきれない。主にコムイが原因で。コムイの頭の中は数世紀先を行っている。なんであんなにスムーズに動くロボット作れるんだよ。なんでバイク作れるんだよ。ロボットが作

れたらヘリコプターも作れるだろうよ。簡単に。

「このワイン、なかなかの代物だな。だいたい１００年程前の物か」
「ワインセラーの中で見つけたんだ」
「嬉しいよ、ありがとう」
「こちらこそ、こんなに貰ったからね」

　ワインをケースから取り出し色んな角度から見てる。それでわかるのか。ていうか、１００年前って凄いんじゃないのか？きっと美味いんだろうなぁ。あのワインセラー、元から部屋にあった物だから自由に使っていたけど実は物凄く価値があるものかもしれない。帰ったら調べてみよう。うん。これが終わったら一度、帰ろう。黙って帰れば問題ないだろうし。飲みたいし、食べたい。

「おい、考えてることが顔に出てるぞ」
「うん？」
「確か、そこの棚にサンドイッチがあった筈だ」

インテグラの指が近くにあった棚を指さす。そこにはサンドイッチとケーキがおいてあった。

「これを飲みながら話をしたい所なんだが、煩い奴らからの要請でな。これからイギリスに行かなければいけなくなった」
「イギリスに？」
「なんだ、意外か？これでも私は外交官だぞ」
「バカな!?」
「なんだそれは!?」
「いやぁ」
「意味が解らん！まったく、お前は変わらんな」

インテグラの突っ込みは、彼女を知る者が見れば驚愕の表情を思い浮かべるだろう。彼女の交友関係は、主に上流階級の人間が多い。普段はお淑やかであり、時には不遜である。故に、この様な砕けた態度を取るのは本当に限られた一握りの人間だけだった。そんな彼女がこんな姿を見せてくれるのは、正直に言ってなかなかに嬉しい。

「また会おう、アーサー」
「ん……わかった。それじゃあ、インテグラル」

インテグラに一礼してから執務室から出ていくとき、気になることを彼女は言った。この時、少しは考えたらよかったんだ。あの娘がここにいない理由を。彼女の能力を。

「あぁ、サーシャはもう先に行ってるぞ」

――バチカン市国・大図書館――

インテグラと別れ、俺はバチカンにある大図書館に来ていた。古い時代の本が眠っていたりするから、ついつい読んでしまう。昔の本で、しかも原本で歴史書だったりしたら忠実に書かれていたりするから面白い。あの時代の歴史書とはなんだったんだと言いたくなるような事が書いてあったりするのだ。この前に来た時なんて、英雄クー・フーリンの愛槍ゲイ・ボルグは一本だけではなく、他にも数本あったらしい。そんな本を見つけてしまい、ついつい「兄貴ェ」と声を出してしまったのも仕方のないだろう。

この大図書館は、数十にも及ぶ巨大な本棚が設置されており棚の中には勿論ぎっしりと本が収められている。小説、学術書、歴史書、兵法書等々と色々なジャンルの本が置かれていた。その区画とは別に、本を読む為のベンチや長机、普通の椅子などが置かれている。

前に来た通り、何冊か面白そうな本を手に取って席に座ったのはいいんだけど、見られてる気がするんだ。でもまぁ、何もしてこなさそうだし放っておいても大丈夫かな。そう考えて、窓の外を見ると太陽はまだ真上を通過したくらいだった。

――同所・???――

数メートル離れた先で、一人の男が本を読んでいた。その姿は、まるで本の中から出てきた登場人物の様で見る者を魅了するものだ。それくらいの魅力がありながら、それでいて近寄りがたい雰囲気を持つ人間。彼の名前は、アーサー・ペンドラゴン。黒の教団において戦闘集団であるエクソシストの頂点に立つ人間の一人だ。その中でも戦闘

能力はトップクラスで判断能力も高く、政治の真似事も出来る注意すべき人間だった。現に、彼は幾らかの大物貴族や他国の大臣とのコネクションを有している。

「……？」

「（感づかれたか？）」

ペンドラゴンが一瞬だけ視線をこちらに向けて、直ぐに逸らした。流石は元帥。その危機察知能力と探知能力は侮れない。流石に監視は気付かれている、か。いや、だとしたら何故、私を排除しない？彼ならば簡単に出来るだろう。私の様な監査官など、本職の元帥が攻撃を始めれば瞬殺されてしまう。ならば、なぜ？……。

取るに足らない存在だとでも言いたいのか、私を。私達を。異常な戦闘能力を持つ部隊を有し、優秀な捜査官と人事権を持つ中央庁を敵ではないと、そう言いたいのか？あぁ、確かにそうだろう。如何に人事権を持っていようが最大戦力の一角である元帥をどうこうしようなど、誰も納得するわけがない。捜査官？彼はエクソシストだ。多少の犯罪は許される。であれば、鴉か？これもないだろう。アーサー・ペンドラゴンと言えば近接戦闘だけに限定すれば勝てる物など存在しない。

――何を考えているのか、全く解らない。

そもそも、彼はどこの指揮系統に属しているのだろうか。通常なら黒の教団本部室長、コムイ・リーか？いや、どうだろうか。元帥の任務は適合者を探すことだ。イノセンスを多数所持する為に危険度が数段跳ね上がる。元帥だからこそ任される任務だ。だが、これまでの彼の行動を見ていれば疑問に思う。我々の目を欺くためにやっている可能性がある。過去に、一度だけ追跡を振り切られた事がある。と言うよりも、いきなり目の前から消失したのだ。北半球に居た筈なのに、南半球にいたという目撃情報が上層部に上がってきた。

再びアーサー・ペンドラゴンを見ると、何やら女性と楽しげに話していた。相手は、この職員である妙齢の女性だ。そう、資料に書いてある。にしても、だ。いい。少し釣り目で、メガネをかけている。金色の髪を簡単に纏めているだけだが、制服を見事に着こなした女性は凛とした佇まいが妙に艶めかしい雰囲気を醸し出していた。その女性と楽しげに話すなど、羨ま……。けしからん。暫くして、その女性が立ち去りまたページを捲り始めた。だが、その女性は再び戻ってきた。手に二つの白いカップとポット、

そして何かお菓子を持って。

――これは、ある意味で人類の半分を敵に回しているのではないだろうか？

対面に座った女性は、こちらからでは表情は窺えないが上機嫌なのだろうと分かる。体が揺れているし、控えめな笑い声が聞こえてくるからだ。だが、そこで彼と目が合ってしまった。

「……ッ!?」

今のは、確実に見られた。一瞬だった。本当に、一瞬アーサー・ペンドラゴンがこちらを見て紅茶を啜ったのだ。やはり、私程度の技量では無理だ。任務は失敗した。アーサー・ペンドラゴンがどこの指揮系統にあるのか、またはどのような極秘任務を請け負っているのかを知りたかったのだが、私の、中央庁が嗅ぎまわっている事を知られた事で限りなくソレは不可能になってしまった。長官。任務、失敗です。私程度ではアーサー・ペンドラゴンを探ることが出来ませんでした。彼の目的もわかりませんでしたし、高位の者との接触もありませんでした。

捕捉：アーサー・ペンドラゴンを観察するにあたって、それに用いられる時間は僅か21時間しかない

社交界

あぁ、空が青いなぁ。インテグラから貰った葉巻をコートから取り出して火を点ける。甘い。だが、いい香りだ。高くなくて低くもない丁度いい気温で、今日は絶好の昼寝日和と言えるだろうがその権利は俺には無い。任務として世界各地を旅している時は気ままに昼寝をしていたのだが、今の状況はそれを許してはくれないらしい。まぁ、それを承知でここまできたのだから仕方のないことなのだが。

インテグラとのちょっとした会談から二日後、俺はとある社交界に出ていた。何時もの団服ではなく、この華やかな場に相応しい恰好でだ。現代人なら、中世の社交界と言えばヒラヒラの服を着て無駄に多い装飾で如何にも動きにくい恰好を想像するだろう。現に、俺もそうだった。だが、実際は違った。男性はタキシードなど、装飾も少なくダンスのしやすい恰好だ。ただ、それに帽子や杖が付いてくる程度。女性は様々なドレスを着ていた。華やかなドレス、匠が造った耳飾りに髪飾り、明らかに一財産はありそう

なネックレス等々。あと香水を少々。

そして俺も他の男性陣に漏れることなくタキシードを着ていた。他と違う所を言うならば胸に教団のクロスが縫っていることと金色のラインが所々に刺繍されているくらいだった。髪型も、何時もは何も手を付けていない状態なのだが、今日に限っては後ろで青いリボンで結っている。まぁ、それなりに髪は長いからな、俺。流石にクロスには負けるが。

社交界となっている会場を見渡せば、大人数の男女は合奏団が奏でる軽快な音楽にのって踊っている。俺の様に立食をしているのは少数派だった。単純に踊れない者、相手がいない者と様々だが、こうしているのは男性が圧倒的に多い。え、どうして誘われないのかって?ははっ。そんなの、誰も誘ってこないからじゃないか。最初に会場に入った時は色々と誘われたりしたのだが、コムイから貰ったメモに書かれた人物の元に挨拶に向かう為にやんわりと断っていたのだ。多分、それが理由で誘われなくなったんだと思う。

少し情けない。そんな事を頭の隅に追いやり、手に持ったフォークを一口サイズに切

り分けられたケーキを刺そうとしたが、それは横から出てきたフォークに阻まれた。あぁっ、狙っていたケーキなのに！

「むぅ、じゃあ上げる」

え？と声を上げるのが先か口にケーキを入れられるのが先か、どちらかわからなかったが口の中が甘くなる。と同時に、どこかで複数の息を呑む声が聞こえた。で、男なら喜ぶ「あ～ん」の状況を創り上げた犯人の方を見ると、そこには小さな少女が立っていた。

色が抜け落ちた白髪ではなく、白銀の髪の毛。可愛らしい鼻に、少し垂れ目の少女。全体的にスレンダーで、まるでその手の職人が創り上げた一種の人形とも言えるような少女が、そのアホ毛を揺らした。

「アホ毛は、アーサーも同じ」

「俺のは勝手に立つんだよ」

「私も同じ」

「そうか」
「うん」
「久しぶり、サーシャ」
「久しぶりアーサー」

軽い衝撃は、彼女が成長したと証明してくれる十分な証拠だった。

社交家の会場となっている大部屋からテラスへと移動した二人を待っていたのは、暖かな日差しと青く澄み渡った空だった。

「ペンドラゴン様、シェスチナ様。どうぞこちらへ」
「ありがとう」
「……ん」

テラスにも、ごく少数だが人はいる。少し踊り疲れたご婦人たちが使用人の淹れた紅茶を飲んで思い思いに羽を伸ばしているのだ。俺たちに話しかけてきた使用人も、例にもれず休憩しにきたのだと思いテラスに設置された椅子に座る。椅子もテーブルも、日除けのパラソルも白で統一されているものだから、清潔感があり益々清々しい気分になる。俺も、少し食べ過ぎて休憩がしたかったのだ。

座って暫くすると、使用人が紅茶と少しのお菓子を持ってテーブルに置いて行った。紅茶を音を立てずに飲む。俺はストレートで飲むが、サーシャはミルクをタップリと砂糖を一掴み淹れて飲んでいる。うん、子供は甘党でよろしい。

「アーサーも人の事は言えないでしょ」
「そ、そんなことはない」
「その手のクッキーは何よ？」
「……ぬ」

無意識のうちにクッキーを手に取っていたようだ。無意識怖い。けど折角あるのだし、食べた方がいい。

「あ、美味しい」
「私も」

二人してクッキーを食べる。甘さ控えめで美味しい。こういう、のんびりとした雰囲気は大好きだ。暖かな気温。聞こえてくる音楽。美味しい紅茶にクッキー。目の前には可愛い女の子。

「ありがと、アーサー」
「ん？……あぁ、そういえばそうだったな」

胸元から葉巻を取り出し、火を点ける。やっぱり美味しい。けど、目の前のサーシャは煙たそうに息を吐いた。それが少し面白くてサーシャに向けて煙の輪っかを造って吹きかけると、サーシャは頬を膨らまして息を吹き続けた。なにこれ可愛い。しかし、息を吐けば苦しくなるのが当然であり、体力のないサーシャの息はすぐにきれた。

「げほっ……むぅぅぅ」

「ごめんごめん」

唸り声を上げて睨みつけてくるが、随分と可愛らしいものだ。これがソカロだったりした日にはエクスカリバーを開放しているかもしれない。全力で。全力全壊、的な。

「すたーらいとぶれいかー」
「あれ、核弾頭が何発分だったけ？」
「地球が割れちゃうね」

ここまで元の世界の話を出来るのはサーシャだけである。この話を他の誰かに聞かれたら、どうなるのか解らない。解りたくもないし、知られたくもない話だ。この世界が、元は漫画で、しかも俺は元々は力を持たない一般人で、この物語を読んでいた一人で未来を知っているなど。誰にも知られたくないし言いたくもない。けど、サーシャは別だ。サーシャ・S・ペンドラゴン。彼女と出会ったのは……そう、一万二千年前だったか。

「え……？」

目の前でサーシャが目を大きくして驚いているが、それは置いておく。

「……え～」

まぁ、詳しい話は置いておくがサーシャを拾ったのだ。文字通り、拾ったのだ。そこで色々とあり、本当に色々とあり俺が保護して今に至る。保護した一番の理由は、色々と危なかったからである。次いでイノセンスを発現していたから。そして、そのイノセンスが戦闘向き（対ＡＫＵＭＡ）ではなく対人であったこともある。サーシャの持つイノセンスの能力とは何か？

それは、心を読むことである。寄生型イノセンス、ラビットメモリー。常時発動型のイノセンスであり、相性がよかったのか体力の消費も少ない特殊なイノセンスである。効果範囲は不明。ただ、強力な能力であるが故に危うい場面も多々あった。だけど、それは過去の話であり今現在は制御もちゃんと出来ていて読む対象を選ぶこともできる人間相手なら反則の能力だ。インテグラがよく外交の場に連れて行ってるのもわかってしまう。汚い。流石フロイライン汚い。

「……あ」
「ん？」

サーシャが俺の後ろに視線を移して固まっている。その視線を辿る様に後ろを見ると、そこには視界いっぱいの白が写っていた。

「は？」
「アッ―サー！」

幼い少女の声が聞こえたと思えば、首が曲がってはいけない方向に嫌な音を立てて曲がった。
ちょっ

「あははー！アーサー、元気ー？」
「むぅ、アーサー大丈夫？」
「お、おぉう」

首の位置を戻し、突撃してきた少女を見れば、ニコニコと笑うロードの姿があった。白いワンピースの様なドレスを着て、腰には大きなリボンを付けている。頭には白色のカチューシャを付けてコンパクトに髪を纏めていた。褐色の肌に良く似合っている。しかし、どうしてロードがここにいるんだろう？

「どうしてアーサーがいるの？」
「それは俺の台詞」
「んーとね、ボクはティッキーに着いて来たんだ」

そう言うとロードは膝に座ってきた。目の前で座るサーシャの目が怖い。いや、可愛らしい。

「ティッキーって、ティキ・ミック？」
「うん。そのティッキーだよ。よく知ってるね」
「ハハ、知ってるも何も、なぁ？」
「うん」

サーシャが頷く。そんな俺とサーシャを見ているロードは何だか面白くないみたいで、置いてあった紅茶を飲んだ。

「むうぅぅぅ！」

「ふふん」

唸り、笑い、苦笑い。三者三様の表情だけど、この二人は気づいているのかな？周りから暖かい目で見られていることを。ご婦人方があらあらとか、仕方ないのねとか。おい、どうして頬を赤らめているんだ。流石に一回り離れている女の子には手は出さないぞ!?そう、そうだ。覚悟せよ。俺は手を出さない！

「おっ、なにやってんのロード」

「ん？あ、ティッキー」

助けてサーシャ！手は出さないけど手は貸して欲しい。

「んげ、ペンドラゴン元帥じゃないの」

　ティキが使用人に何かを頼んだと思えば、椅子が二つ用意され紅茶も出てきた。テラスで休んでいたご婦人方も、なんだか続々とテラスから出て行ってるし。え、なに？ここに座るの？俺とサーシャ、エクソシストなんですけど。ていうか、さっきから違うエクスカリバーがムズムズするんだけど、これって気のせいだよね？そうだよね!?

「気のせい」
「うん、気のせいだよね」
「うわ、ちょっと～なにするの」
「貴女はここに座るべき」

　サーシャがロードを膝の上からどかして、使用人が新しく持ってきた椅子に座らせた。そしてサーシャは当然の様に俺の膝の上に。ブルータス、お前もか。

「で、どうしてペンドラゴン元帥がここにいんのよ？」
「それも俺の台詞なんだが、ミック卿がどうしてここにいるんだ？」

「俺は千年公のご命令でな。時々こうして表に出て資金を稼いでんだよ。そっちは？」
「俺も似たようなもんだな」
「お互い様だなぁ」
「苦労してんだな、そっちも」

　ポケットから普通の煙草を取り出し、火を点ける。ティキも同じように煙草を取り出して火を点けた。よく見ると同じ銘柄だ。視線を横にずらせば、サーシャが紅茶を飲みロードがクッキーを頬張っている。

「でさ、いきなりで悪いんだけどちょっと付き合ってくれない？」
「なにに、だ？」
「まぁ、苦労ついでだと思ってさ――――」

　身体の底から力が湧いてくる。感覚が研ぎ澄まされていく。

「そうそう、そうでなくては。さァ」

ティキが顔を愉悦に歪める。戦いの、殺し合いの愉悦に。

「チッ」

虚空から黄金に光る聖剣が出現し、手に収まる。

「殺し合おうぜ」

ティキから黒い蝶が舞い上がった。

１３．５話　サーシャ視点

アイツが、アイツらがここに来た途端にアーサーの纏う空気が変わった。二人とも褐色の肌を持つ人間で、アーサーの友人なのだろうと思った。けど、違う。アーサーが友人に対する態度は、空気はここまで硬くない。だから、心を読んだ。

――やめといた方がいいよぉ

「――――ッ」

アーサーにくっ付いてベタベタしているロードという、私と同じぐらいの女の子の心を読んだ。いいや、読んだんじゃなくて読まされたんだ。怖い。この二人は人ではない。そう理解してしまった。ソレを理解している筈のアーサーは、纏う空気は違えど自然体で接している。何時ものように、変わらずに。だから安心できるのだけど、アー

サーは油断し過ぎだと思う。どうしてロードを膝の上に乗せているのだ。それは駄目だ。そこは私の特等席なのだから。

そうしている間に、ティキが人払いをしてアーサーの向かいに座った。ロードは私と向かい合う様に座っているけど、いつ立ち上がるかわかったものじゃないから少し警戒しておこう。特等席は私のだから特等席というのだ。もし取ろうというものならエヌマ・エリシュでも撃ち込んでやろう。持ってないけど。アーサーとティキの世間話に耳を傾けると、とてもじゃないけど内容は公開できるものじゃないくらいに酷いモノだった。

千年伯爵の命令で資金集め？なんだそれは。アーサーも、教団の資金集めなんて言わないで。いくら面倒だからでも、心の中でそんなにハッキリ言わなくてもいいじゃない。だから、一言だけ。アーサーに言ってやろうと思って声を出そうとしたとき。形容しがたい色がティキから溢れ出してきた。

声が出ない。喉は乾いて、震えが止まらない。この感情を、色を、私は知っている。それは、純然な殺意。怖い。体が震える。

――もう、正気を保てない！

暖かな色がアーサーから溢れてくる。光と共に、優しい色。私が初めて感じたアーサーの色。好意の感情。体の震えがなくなる。喉の渇きもマシになってくる。大丈夫だと、そう安心させてくれる。何時の間にか、私は光に包まれていた。それはアーサーが絶対の信頼を置く、彼のイノセンスの光。ティキが放った黒くて不愉快な蝶を寄せ付けることなく、全てを防いでくれる。

「サーシャ、そこでじっと待ってるんだ」

「うん。頑張ってねアーサー」

次の瞬間にはアーサーは飛び出していた。

「うなっ!?」

「もー、こんな所で暴れないでよ」

「……箱舟？」

「知ってたんだ、サーシャちゃん」

ロードが驚いた表情を見せたけど、そんな余裕は私には無い。突然にして風景が変わったのだ。アーサーに聞いていなければ、もっと取り乱していたに違いない。それにしても、なんなんだこのデタラメ人間の万国ビックリショーは。ティキは空中に浮かんでるし、ロードも空中に浮かんで趣味の悪い傘と喋ってるし。アーサーもアーサーで、何を平然と戦っているのだ。周りがしっかりと見えている筈なのに。ていうか、ここどこ？

戦闘開始ｉｎ箱舟

ティキ・ミックの使徒としての能力は、万物を選択する能力である。例えば、人間。彼は人間の体内にある心臓を能力を使う事によって破壊或いは抜き出す事が可能である。『心臓だけを抜き出す』と選択し、服、皮、血液、筋肉、脂肪、骨を素通りして心臓を抜き取るのである。心臓だけを選択しているのだから、大動脈や大静脈といった血管は千切れてしまい出血してしまう。心臓を引き抜かれた時点で、その人間は死んでしまうのだろう。また、万物を選択出来るのだから空気も選択出来る。その結果が、まるで空中に立っている様に見えるのだ。非常に使い勝手がよく汎用性がある能力ではあるが唯一、選択出来ない物体がある。神の結晶とも呼ばれ、不思議な力を帯びた物質であるイノセンスだ。対ＡＫＵＭＡ武器であるイノセンスがＡＫＵＭＡに有効な様に、人類の敵である使徒に対しても有効なのだ。イノセンスの能力は非常に強力な物であるが、使い手によるものが大きい。イノセンスを発動した者がルーキーな程に力は小さく、ベテランである程に力が大きくなる。

では、元帥であるアーサー・ペンドラゴンが使えばどうなるのか。

綺麗な街並みが見れる一角で、白煙が上がっていた。アーサーがロードによって引き摺りこまれた世界は小さな街だった。大きな塔が世界の中心にあり、その塔を囲むようにして街が広がっている。人間の姿は無い。人間が〝いてはいけない〟世界だからだ。

「やるねぇ、元帥」

「……」

「また無反応?やめて欲しいね。殺りにくいったらありゃしない」

ティキが俺を見ながらそう言ってくる。その前に、だ。一言だけ言わせてほしい。どうしてこうなった?俺とサーシャは今までバルコニーに居た筈なのに、気が付いたら箱舟の中にいる。そんな馬鹿な。チラリと横を見れば。サーシャはバルコニーに設置されていた椅子に座って呑気にミルクティーを飲んでいる。ふざけるな。そんな心の声が聞こえたのか、サーシャは可愛らしく舌を出して片目を瞑り、右手を頭の上に持って行った。

――てへぺろ

「……」

「あぁ、ダリィ。俺もお前の事をアーサーって呼ばせてもらうぜ？」

「別に構わない」

「おっ、やっと喋ったな」

サーシャから視線を外し、ティキを見れば丁度タバコを咥えていた。律儀に待っていてくれたらしい。見た目はイケメンな男なのだけど、その体から発している殺気が違うと伝えてくる。もう、アレだ。背筋がピリピリするし、そろそろ殺気を放つのを止めて欲しい。というか、だ。どうやって箱舟から出ようか。英雄王なら乖離剣を使って出れるだろう。アレはそういう宝具だ。俺の持つエクスカリバーでは不可能な領域だ。こういう時の切り札は幾つかあるけど、どれも時間が必要でとてもじゃないけど実行は不可能に近い。

「なぁ、アーサー」

「……なんだ？」

「カードはするか？」
「は？」
「だから、カードだよ」

そう言ってポケットから取り出したカードはトランプだった。カードの端が破れたりしているから、よく使っているらしい。いや、知ってるけどね。アレンにぼろ負けしてたし。

「偶になら」
「そうか。俺はさァ、よくやるんだよ。その中でも気に入ってんのが賭けなわけよ」
「やるのか？」
「そっちの方が面白いだろ？いいよな、ロード」

何時の間にか、ティキの隣に移動していたロードが面白くなさそうに眉を寄せた。

「え～、このまま連れて帰ろうよ～」

「おま、それは流石に千年公が許しちゃくれないだろ」
「仕方ないなー、いいよ」
「よし決まり」

短い会話を終えて、ロードは屋根の上に飛び移った。あれ、ロードの身体能力ってあんなに高かったか？普通の女の子程度の筋力じゃなかったか？ビックリなんだけど。

「アーサー、本気でやろうぜ」
「本気で？」
「あぁ。お前、本気で戦った事なんてないだろ？」

え、いやいや。ありますけど。ていうか、常に本気なんですけど。ＬｅｖｅｌのＡＫＵＭＡにだって奇襲されれば死にますけど。正面から来られても死にそうになるし。
「けど、ここでならどれだけ本気でやっても構わねぇ。もうそろそろ引っ越しするしな。なぁ、だから本気でやろうぜ」

――瞬間、衝撃、轟音、悲鳴、痛み、圧迫感、光

気が付けば、家の残骸に埋もれていた。蹴り飛ばされたとだと理解するまでにそう時間はかからなかった。身体にのっかてる残骸をどけて立ち上がると、ティキが足を上げていたからだ。足、長いね。少し視線をずらせば、サーシャがロードに捕まっていた。なにやってんの。

「それにしても、結構吹き飛ばされたな」

先ほど立っていた位置から数十メートルは離れていた。あれ、なんだか苛立ってきた。行きたくもない舞踏会に行かされ、やりたくもない戦いを挑まれている。足蹴にもされた。おぉ、これは怒ってもいいんじゃないだろうか?うん。怒ろう。怒るべきだ。

エクスカリバーを水平に。切っ先を敵に。回転せよ。いくぞ。

「――偽・ストライク・エア」

数件分の家の残骸を巻き込みながら、風の塊はティキに直撃する。違う、直撃はしていない。防がれた。拒絶したか。彼の差し出した右手の前で風と瓦礫は何かに当たったかの様に静止し、その威力をなくして止まった。やはり、強い。一筋縄ではいかない相手だ。あれ、今のちょっと恰好よくない？

顔がニヤケそうになった時、金色のボタンが目の前に飛び出してきた。いや、ティキが投げてきた。

『Ｋｅｖｉｎ　Ｙｅｅｇａｒ』

驚愕した。その事実に。思い出せ。どうして、ノアの一族であるティキ・ミックが俺の目の前に現れた？偶然か？それとも狙った事か？違う。そんな事はどうでもいい。ノアの一族が我々エクソシストにしたことは、一番デカい出来事はなんだった？そう、エクソシスト狩りだ。傷のついたボタンには、良く見れば染みが着いている。血だ。誰の？決まっている、イエーガー元帥の血だ。それをどうしてティキ・ミックが持っている？決まっている。彼が、殺した。では、どうする？

「そうそう、その顔だよ。その顔が見たかったんだよアーサー・ペンドラゴン」

「……」

「人間の、そういう顔があるから面白んだよ」

うるさい。

「そのケビン・イエーガーって元帥は強かったぜ?なんせ確実に殺せなかったからな」

彼は何時も最前線で戦ってきたエクソシストだから。

「けど、あの傷じゃ死んだも同然だよなぁ?」

治療し、一時的に意識が回復するも、彼は死んだ。

「あそこの少女はどうする?心臓を引き抜くか?それとも人間に渡して壊してみるか

？」

ティキから黒い蝶が飛び出した。

「あぁ、あぁ、どれも面白そうだ。なぁ？アーサー・ペンドラゴン」

あぁ、もう駄目だ。限界だ。言葉を選ぼうにも選べない。

「黙れ」

戦闘開始ｉｎ箱舟―その２

「黙れ」

そう呟いた瞬間、アーサー・ペンドラゴン元帥が変わった。見た目から、雰囲気まで全てが変わっ。何時だったか、千年公から聞いたことがある。イノセンスは、エクソシスト次第で進化するモノだと。だが、それはエクソシストになって間もないビギナーに起こる現象で、決して元帥の様なベテランに起こる現象ではない。否、起こっていい現象ではい。なぜなら、それはエクソシストにとって一つの壁を乗り越えるのと同じだからだ。アーサー・ペンドラゴンから噴き出ている黒い煙が晴れたらどうなるのか解らない。

故に、警戒した。

エクソシストで最強クラスのアーサー・ペンドラゴンが一つの壁を乗り越えればどう

なるのか。散々挑発してなんだが、後悔した。こんな感覚は久しぶりだ。自分が死ぬ可能性のある戦場。首筋がピリピリとする感覚。震えている手は、武者震いか、あるいは――――。

「怖いねぇ、イノセンスってのは」

煙が晴れてきた。いや、違う。アレは煙がアーサーに吸い込まれている。冷や汗が流れ出る。

「ロード、少し離れてろっ！」

「もう、なにしてくれんのよティッキー」

ロードが消える。エクソシストの少女は残されているが、そんな事は知ったこっちゃない。こちとら命の危険を感じてるんだ。これ、後で千年公にドヤされるんじゃないか？ターゲットでもないアーサーを殺す。それはいい。だが、それによって被害が及ぶとなれば千年公は怒るだろう。本来ならアーサーを殺すのは千年公だからだ。俺達でもなく、千年公が動く。これが意味するのは破壊の二文字だ。例えば、俺がクロス・マリ

アンと戦ったとしよう。負ける気はしないが、それでも深手を負うだろう。なら、千年公が戦えばどうなるのか。俺はこう思うね。千年公は負けない。

そう思考して、眼前のアーサーを凝視した。煙が晴れたのだ。エクソシストとは、ムカつくが聖職者だ。だが、

――禍々しい

何だその恰好は。

――これが聖職者？

ふざけるな、これはそんな生易しいもんじゃない。

――イノセンスは、一体なんなんだ

お前の持つ剣は、そんなにも黒かったか？

瞬間、目の前が爆ぜた。

赤色。黒色。朱色。黒色。紅色。漆黒。

「グがぁあッ!?」

斬られたと知覚する前に背中に衝撃が走った。

「一体なにが……ッくそ」

そして気づいた。さっきまで立っていた所にアーサーが立っていて、俺は吹き飛ばされている。それだけ。ただそれだけの事だけなのに。こうも差が生まれる物なのか！足が震える。目が霞む。それでも立ち上がる。立ち上がらなければ、ならない。俺がふっかけた喧嘩だから。そして、アーサーをしっかりと見た。

顔の造形はなんら変わりない。無表情ながらも、精巧な顔をしている。だが、その眼

は見ることが出来ない。黒いバイザーを付けているからだ。青い騎士服に銀色の甲冑はどこにもなく、全てが黒に染まっていた。そして鼓動を繰り返すかの様に轟いている赤い血管の様な禍々しい線を帯びている。放つ殺気は、今までの物よりも遥かに痛々しく純粋な恐怖を呼び起こされる。ありえない。それは、その恰好は最早エクソシストなんかじゃない。もっと別の存在だろう？なぁ、アーサー。

「卑王――――」

「おいおいおい、冗談だろ？」

剣を肩に担ぐようにして構えた。剣からは禍々しい黒い光が溢れている。いいや、溢れているだなんて生易しいもんじゃない。まるで泥の様だ。

ははっ。笑っちまうぜ。斬撃による胸部の裂傷。それによる出血。足が震え目も霞む。こんな状態でアーサーの大技を躱せ？無理だ。なら、受け切るしかないだろう。上手くやれば受け流すことも可能だろう。

「――鉄槌」

「ティィィィィィズゥゥゥゥゥゥゥゥ!!!」

凄まじい轟音と共に一部が崩壊した箱舟を見た千年伯爵は、完全に箱舟の破棄を決定。ティキ・ミックを回収する一方でアーサー・ペンドラゴンとサーシャ・ペンドラゴンの追撃にかかるも失敗。完全に見失い箱舟の内部から逃げられてしまう。

黒の教団側では、エクソシスト狩りによる被害によりエクソシスト及びファインダーの多数の死者を確認。代表エクソシスト、ケビン・イエーガー元帥。代表ファインダー、レイン・ココット。以下数百名に及ぶ死者。

そして――

――行方不明者、アーサー・ペンドラゴン元帥。サーシャ・ペンドラゴン。

この二名に関しては各エクソシスト部隊から一名を選出して捜索にあたっている。

また、新聞等の情報機関に顔写真を載せ情報を収集している。

「……ファッ!?」
「嫌な事件だったね」
「おい」

第１５話

　意識がだんだんと覚醒していく。完全に眠っている状態から目覚めるまでの僅かな時間。その時間はは、俺にとって恐怖となる時間だ。普通、というよりも世間一般では心地よい時間であることは間違いないのだ。特に冬であれば、布団が放つ魔力は非常に強大なものになる。学校があろうとバイトであろうと会社があろうとも布団から出たくなくなるのだ。たぶん、こんな感じが世間一般の微睡んでいる等といった感じなのだろう。だけど、俺にとってあの瞬間は、なんだか体が水の中にあるかの様に錯覚してしまう。浮いている、というのだろうか。とにかく、そんな感じ。

　水中から空を見上げるような不思議な感覚。ぷかぷかと浮かびなからもどんどんと覚醒に近づいていくと、目の前に美女が現れた。まるで重力の無い空間に浮かんでいる様に長い金色の髪が広がっていて、太陽の光に照らされて輝いて見える。服装はドレスで、無駄な装飾は一切ないが非常に綺麗だ。瞳の色は同じエメラルド。人間離れした美女が、そこにはいた。その美女が口を開いた。きっと、聞こえてくる声もソプラノの様

に、鳥の囀りの様に耳に良く響き、聞きやすい音なのだろう。

「ぶるあああああああああああッあああ！」

「解せぬ」

解せぬ。

だだっ広い大海原を往く。ただし二本の足で。うん、おかしい。どう考えてもおかしい。この時代であっても、船に乗って海を渡るというのが常識的で普遍的な交通手段な筈である。それが例えエクソシストであっても常識的な事である。が、しかし。箱舟での戦闘で通信機を失い団服も破れに破れてしまいエクソシスト支部の場所も解らなければただで乗せてくれる船もない。もう、そんな状況にあるのなら教団が見つけるの待っちゃいなよｙｏｕ。とか誰か可愛い女の子に言ってほしい所であるのだが、そうは

いかない状況がある。現状を一切把握できていないのだ。

俺、アーサー・Ｓ・ペンドラゴンとサーシャ・Ｐ・シェスチナの現状は把握できる。一つが迷子。二つ目が、新聞で情報提供を募っていたのだから、恐らく本部への即刻帰還が望ましいのだろう。三つ目は俺の後頭部に柔らかくて暖かいモノが当たっているということだ。この三つが俺達の現状である。

「……後で怒るからね」

「てへぺろ」

Ｑ．では、教団側の現状は？

Ａ．一切把握できていない。

大問題である。何が大問題でるのかと言えば、話がどこまで進んでいるのかが解らないことと、出来れば救える命は救いたいという、俺のエゴを押し通す事が出来ない事だ。まぁ、非常に自己中心的な考えだけど流儀は仕方がない。

それで、今は原作で言う所のエクソシスト狩りの真っ最中だと思う。ティキ・ミックがイエーガー元帥を戦闘不能になるまで追い込んだと言っていたし、俺を襲ってきたのがいい例だと思う。彼ら千年伯爵側は元帥クラスの実力者とはなるべく戦わないでいた。被害が大きいからという簡単な理由だけで。それが、イエーガー元帥と俺を襲ってきたのだから今はエクソシスト狩りの真っ最中だと考えていいだろう。一応ではあるが、本部に『出来るならエクソシストと合流して帰還する』と手紙を送っている。

だから、こうして大海原に出て東に向かって歩いている。それなりの精密さを誇る航海図を海に出る前に見て、コンパスを何とかして買い出発したのは何日前だったか。え？どうして海を歩いてるか？そんなの、海を渡らなければ本部に帰れないからじゃないかハハッ。

「四日前」
「あれ、もうそんなになるの？」
「そろそろこの体勢も飽きた」
「ずっと座ってるだけだからいいじゃん」
「それでも陸地がいい」

頭上でサーシャがぶーぶーとへこたれているけど、その気持ちはわからないでもない。と言うよりも、この四日間は殆ど陸に足を着けていない。二日前に島と言うのも烏滸がましい岩の塊の上に何とか眠れるだけのスペースを造りだして眠ったのが最後だ。我ながらハードモードに突入していると思う。食事は背負っている大きなカバンの中に一月分ある。風呂？風呂は天然の雨水だ。あぁ、ワイルドだろ？

トイレ？

「それ以上考えれば私は覇王断空拳を使わざるを得ない」
「止めてください死んでしまいます」

こんなにもくだらない話を続けてしまうほど、暇で退屈で羞恥心とか色々と混ざり合ってどうしようもないくらいにエクスカリバーを放ちたくなる。

「それはいい考え」
「だろ？周りには何にもないから一度、本気で放ってみたいんだ」

「私のいい暇つぶしになる」
「よし、早速やってみるか」

右手を虚空に翳し、黄金の輝きを放つエクスカリバーを〝引き抜いた〟。鎧の展開は不要。その分の魔力は剣に向けろ。足場は、波で安定しない。前方、左方、右方、後方。前方に障害物なし。
さぁ、いこうか。

「エクス――――」

一歩踏み込み

「カリバー――――」

腕を振り下ろした。

海は割れ、空も割れ、薙ぎ払い出来た溝に海水が入り凄まじい揺れが俺を襲った。そして直感した。あぁ、これ失敗したわ。

「うっぷ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

背負ったサーシャから聞こえる呻き声と吐く前の小さな苦悶の声。海は荒れに荒れている。しかも、その発生源に一番近いというか発生源は勿論、揺れに揺れている。高低差は１０Ｍといったところだろうか。これ、小舟だったら転覆するぞ。

「……転覆の前に吐くかもっぷ」

「吐くならここで頼む」

サーシャをお姫様抱っことは逆の持ち方で抱いた。右手に胸が当たってるけど、そんな事は気にしない。左手は硬いのだから、別にいいじゃないか。

「そんなの、関係ある……オロロロロロロロ」
「ホントに吐いたー!?」

罪悪感に苛まれながら、サーシャの背中をさすってやる。気分が悪い時は吐けばスッキリする。だから、もうこの際だ。吐いてしまえ。

「……これが終われば覇王空破断を叩き込むゥおろろろろろろ」
「おぉ、よしよし」

そうして幾らかの時間が過ぎ、ふと視線を感じ上を見上げてみると黒いゴーレムはパタパタと飛んでいた。

「……」
「おろろ……うっぷ」

その後、ゴーレムに着いていく事5時間。俺とサーシャは無事に陸へと到着した。

第１５．５話

とある港町の宿

目の前でガツガツと６品目のメニュー、餡かけチャーハンを食べているアーサーとその隣でリスの様に口を動かしながら可愛らしく４品目のメニュー、ピザを食べているサーシャの二人を見て神田とマリの二人は呆れていた。凄まじい轟音をマリが捉え、二つ目の太陽が出来たと錯覚するまでの光量を見た神田がゴーレムを飛ばすと、そこには海上に立ったアーサー元帥が吐くサーシャの背中をさすっている異常な状況があった。そこから色々した後、宿でシャワーを浴びて服を新調して現在に至る。

「ユウ、マリ……助かった」

「……ありがとう」

漸く一息ついたのか、アーサー元帥とサーシャは俺とマリに礼を言った。

「いえ、元帥が御無事なのでしたらよいのです」

「おいマリ、それ以外にも言う事があるだろうが」

そう、二人とも無事なのは良いことだ。だが、そんな事は解りきっている。アーサー・ペンドラゴンが一緒に居て、サーシャ・シェスチナが傷つくことは万が一にもない。これは彼を信用しているのでも無く、信頼しているのでもなく、ソレが事実だからである。彼の剣技は異常だ。剛腕からなる一振りは高レベルのＡＫＵＭＡを切り裂く。破壊力もありながら速さもあるが、そこにはしっかりとした剣技がある。決して型に嵌ることのない奇抜さも持っていて、偶にやる稽古では一度も勝てたことが無い。

一刀しか持ってないのに二刀持っていて手数で押せないとか、どういうことだ。一撃が重くて二刀でやっと防げるとか、どんだけバカ力なんだ。確実に右手で刀を持って振り切ったと思ったら、実は左手に刀を持ち代えてがら空きのわき腹にぶち込まれたりもしたな。刀と剣は違うけど、同じ剣士として純粋に尊敬できる相手だ。

手元にあるお茶を啜ると、隣に座るマリが本題に入った。

「アーサー元帥。教団より指令を預かっております。これを」

「ん」

アーサー元帥が茶色い封筒から取り出した二枚の紙には、それぞれ違う印が押してあった。一つは見覚えのあるコムイが使っているものだ。それを読んだアーサー元帥は目を細め、そして持っていた紙を破いた。そのまま何も言わずに二枚目の紙へ目を通す。こっちの印は……どこの家紋のものだ？はて、と首を傾げているとサーシャが珍しく口を開いた。

「……サー・インテグラル」

「サー？貴族なのか」

「知らないの？」

知らない。インテグラルなんて名前は聞いたこともない。というより、そっち側の権力には興味が無い。俺の目的は只一つだから。

「……そう。なら、フロアに聞いてみて」
「元帥に？」

それっきり、サーシャは黙ってしまった。と思えば身体をアーサー元帥に密着させて寝てしまった。あー、アーサー元帥の話じゃもう何日も海上だったか。子供だから、仕方ないか。そうしている内にもアーサー元帥は二枚目の、サー・インテグラルからの贈り物を読み終えていた。じっと目を閉じて、何かを考えているようだ。

ふと、視線を隣に移せばマリが冷や汗をかいていた。

神田とサーシャの会話を聞きながら、私――マリ――はアーサー元帥の心音を聞いていた。私は目が全く見えない代わりに音を聞き取る能力が常人の遥か上をいく。それは例え騒がしい宿の一角であっても人一人の心音を聞き取れる程度には耳がいい。そ

れ故に、アーサー元帥がコムイ室長からの、教団からの指令を読み終えた時の怒りにも似た心音を聞いた。只一度、〝ドクン〟と。そしてソレを破り二枚目のサー・インテグラからの贈り物を読み終えた時の静かな心音が聞こえた時、やはりと思った。

アーサー・ペンドラゴン元帥は、騎士だ。誰が言おうと、その風貌と相まって騎士に見えるそうだ。実際に話してみれば、思慮深く目が不自由な私に親切にしてくれるし音を使った遊びも教えてくれた。それくらい、優しいのだ。恐らく、コムイ室長からの指令は教団への即刻帰還命令だろう。だが、破り捨てたと言う事は帰還命令を無視したと言う事。これからアーサー元帥はどうするのだろうか。

隣から視線を感じた。

「神田？」

「どうしたマリ」

神田に指摘され、初めて自分が冷や汗をかいている事を知った。知らず知らずに緊張していたみたいだ。私らしくもなく、身内に対して……。

「神田、マリ」
「どうした」
「こら神田。また元帥に向かってそんな言葉使いを」
たっぷりと間を開けてアーサー元帥が答えを出した。
「俺は帰らない。フロアはどこだ？」